

ブルガリア・トラキア地方における 前期青銅器時代エゼロ文化の系譜と成立

—主に土器装飾を手がかりにして—

千本 真生

The Origin and Formation of the Early Bronze Ezero Culture in Bulgarian Thrace

Masao SEMMOTO

本稿では前期青銅器時代にブルガリアの上トラキア平野で展開したエゼロ文化の系譜と形成過程について考察する。基礎資料にエゼロ文化の土器装飾をとりあげ、前期青銅器時代とその先行期に当たる「移行期」の上トラキア平野と周辺地域に分布する資料と比較する。比較分析は儀礼関連の遺構に伴う土器も含めて行う。その結果、エゼロ文化はドナウ川下流域のチェルナヴォダ III 文化と、黒海北西地域のウサトヴォ文化と系統関係をもつことが明らかになる。チェルナヴォダ III 文化が先に上トラキア平野に登場し、その後ウサトヴォ文化の影響と合わせてエゼロ文化は形成された。エゼロ文化形成の歴史的背景には黒海北西の内陸部における社会変動が想定される。

キーワード：ブルガリア前期青銅器時代、上トラキア平野、エゼロ文化、土器文様、伝播

In this paper, I examine the origin and formation processes of the Ezero culture in the Upper Thracian Plain in Bulgaria mainly by comparing pottery decorations from the Ezero culture, as basic, with those of the surrounding areas in the so-called “Transitional Period”, and the beginning of the Early Bronze Age. A comparative analysis is also conducted using pottery in ritual contexts. As a result, it has become evident that the Ezero culture had genealogical ties with the Cernavoda III culture and the Usatovo culture, each of which occupied the lower Danube and the northwestern Pontic area. After the arrival of the Cernavoda III culture in Upper Thrace from the north, the Ezero Culture was formed through combination of the Cernavoda III elements and those of the Usatovo culture. It is presumed that this process of pottery stylistic formation took place under the influence of considerable social and cultural change in the inland area to the northwest of the Pontic region.

Key-words: Bulgarian Early Bronze Age, Upper Thracian plain, Ezero culture, pottery decoration, diffusion

はじめに

ヨーロッパ南東部に位置するバルカン半島は、東のアジアと西のヨーロッパ、そして北の草原地帯と南の地中海を結ぶ交通の要衝を占めている。ブルガリア・トラキア地方（上トラキア平野）は半島の南東部に拡がり、三方向を山々に囲われ、残り一方の東は黒海に向かって開いている。北のバルカン山脈と南のロドピ山脈に水源をもつ支流を集めたマリツァ川は、上トラキア平野の中央部を西から東へと貫流している。

バルカン半島には今日まで考古学者によって定義づけられた多くの「文化」が乱立し、エゼロ文化はこの内の1つに数えられる。この文化は前期青銅器時代の上トラキア平

野に所在するエゼロ（Ezero）集落遺跡を示標にして名付けられた（図 1-1）。ヨーロッパ先史考古学研究のなかで標識遺跡としての位置付けを付与されたものの、文化名と限られた資料だけが通史的な歴史叙述に用いられてきた。

本稿の目的は、これまであまり問われてこなかったエゼロ文化の系譜と成立に関する考察を行うことである。はじめにエゼロ文化の起源に関わる研究史を整理し、問題の背景を明らかにする。分析資料として、エゼロ文化前葉段階（エゼロ A 段階）¹⁾とそれに先行する地域文化の土器装飾を中心に取り上げる。装飾を施文法と文様形態をもとに分類し、各要素の相互比較を行って、その時空間分布の様相を示す。比較の結果に葬送儀礼と関係する土器を補足資料

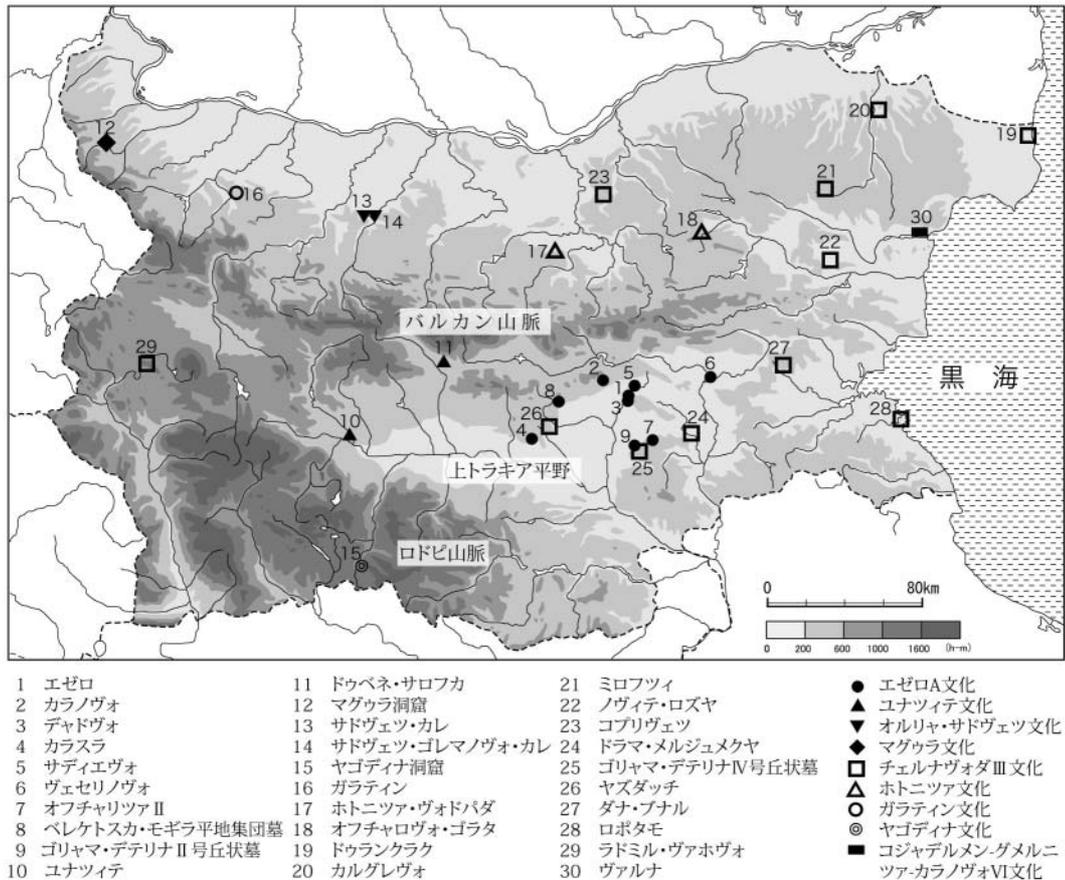


図1 後期銅器時代から前期青銅器時代までの主要遺跡分布図
(Manzura 2003; Morintz und Roman 1968; Nikolova 1999; Лещаков 2006 をもとに筆者作成)

として加味した上で、エゼロ文化の開始期について論じる。

I. 研究背景

(1) エゼロ文化の概要

エゼロ文化とは上トラキア平野に位置するエゼロ遺跡の前期青銅器時代資料に代表される考古文化である²⁾。当文化の期間は前4千年紀末から前3千年紀末までのおよそ千年間に相当する。エゼロ遺跡の調査を指揮したG. ゲオルギエフ (Georgiev) らは上トラキア平野全体をエゼロ文化圏として捉えた (Георгиев и др. 1979: 523)。のちに、上トラキア平野西部に位置するユナツィテ (Yunatsite) 遺跡の土器の特徴がエゼロ遺跡のものと異なるという所見が提出されると (Катинчаров и Мацанова 1993: 156-157)、新たに設定されたユナツィテ文化は平野西部を、エゼロ文化は残りの東半分を占めると理解されるようになった (Nikolova 1996: 156, 2000: 37-38)。

エゼロ文化と先行する後期銅器時代との間に見られる考古資料上の著しい相違点は、これまで幾度となく指摘されてきた (例えば, Georgiev 1961; Тодорова 1986)。後期銅器時代にはヴァルナ墓遺跡に代表されるような金や

銅の製品、彩文土器などの豊富な副葬品を有する墓と、計画的に配置された住居や通路、そして居住区域を囲う防御施設で構成される集落が登場し、ブルガリア先史時代の中で文化的にも最も栄えた時期であると言われている (Тодорова 1986: 182-213)。ところが前期青銅器時代になると、豪華な副葬品は姿を消し、土器の装飾は質素なものに取って代わった。この変化を理解する手がかりとして厚さ30~40cmを測る間層が、カラノヴォ (Karanovo) 遺跡など主に上トラキア平野に位置するテル遺跡の後期銅器時代層と前期青銅器時代層の間で検出されている³⁾ (Лещаков 1997: 9-58)。考古資料内容の相違と間層の存在は後期銅器時代と前期青銅器時代間における文化的な断絶を示していると理解され、研究者らはこの現象について数多くの仮説や解釈を提出してきた。

(2) いわゆる「移行期」について

仮説の概略を述べるまえに、いわゆる「移行期」について言及しておかねばならない。1970年代に理化学的分析による絶対年代の調査がブルガリア先史遺跡を対象に行われた。その結果、後期銅器時代の終了年代と前期青銅器

時代の開始年代の間には数百年以上の開きがあることが判明したため、この期間は「移行期」と呼ばれるようになった (Тодорова 1979: Таб. 3)。

90年代には、それまで公表されていなかったC14年代の試料を加えた新たな分析が行われた (Boyadziev 1995; Görsdorf und Bojadziev 1997)。結果として、以下の4つの点が指摘されている。1つはブルガリアにおける後期銅石器時代と前期青銅器時代間の年代は4100/3900BC～3300/3200BCを示すこと。次にブルガリア北部とロドピ山脈に分布する遺跡の年代は移行期前半の3900BC～3700BCに収まること。3つ目は3700BC～3300/3200BCの年代に収まる集落遺跡はブルガリアでは知られていないこと。最後に上トラキア平野では移行期の絶対年代と対応する遺跡そのものがまだ確認されていないことが明らかにされた⁴⁾ (Görsdorf und Bojadziev 1997: 121)。

(3) 後期銅石器時代から前期青銅器時代への変遷に関する3つの仮説

後期銅石器時代から前期青銅器時代の移行期に相当する凡そ800年もの間、上トラキア平野は人間集団の住まない荒野となってしまったのだろうか。一連の絶対年代の分析結果は、必ずしも上トラキア平野における移行期遺跡の不在を意味している訳ではないが、ここでは問題の時期を取り扱った3つの代表的な仮説を掲示することができる (禿・千本 2008: 102-103)。

1つ目は移住民仮説で、M. ギンブタス (Gimbutas) の解釈が典型的である。ギンブタスは自らの解釈をクルガン仮説⁵⁾と呼び、黒海北の草原地帯に展開していたウマを操る集団が東欧に移動あるいは移住し、各地に大規模な社会変動を招いたと主張した (Gimbutas 1970, 1973, 1977, 1979)。例えば上トラキア平野とブルガリア北東部の後期銅石器時代集落には、住居などの焼失遺構を含む焼土層をともなって放棄される事例が報告されている (Тодорова 1986: 51-77)。この仮説の実例として取り上げられたユナツィテ遺跡では、約50体分の人骨が後期銅石器時代最上層の焼土内で検出された。中には頭蓋骨に外傷の痕跡をもつ人骨も発見されたことから、当遺跡の在地集団はギンブタスが「草原の民」と呼んだ外来のクルガン文化集団によって壊滅的な被害を受けたと解釈された (Merpert 1997: 74-75)。

2つ目は気候・環境破局仮説で、この説を主張したのはH. トドロヴァ (Todorova) である。トドロヴァは後期銅石器時代終末段階 (前5千年紀末) に起きた地球規模の気候変動 (温暖化) によって、ブルガリア各地で生活を営んでいた集団はそれまでの生活形態を維持することができなくなったと論じた (Todorova 1995: 89)。上トラキア平野

に関しては気候変動による生態系の変化が、テル集落の放棄とロドピ山脈への集団移住を引き起こしたと考えられている⁶⁾ (Todorova 1995: 90)。

3つ目の社会変動仮説は近年L. ニコロヴァ (Nikolova) によって提唱された。この仮説では後期銅石器時代終末段階の気候変動による適応戦略として、上トラキア平野の在地集団が農耕牧畜を営む定住生活から移動性の高い牧畜生活へと生活形態を変えたと述べられている (Nikolova 2000: 4-8)。トドロヴァ説との違いは生活形態の変化を迫られた在地集団が、上トラキア平野やその周辺地域を季節的に移動する生活を営むようになったと指摘している点にある。しかも、この集団は現代まで考古学的な痕跡を残さないような生活を営んでいたとも解釈された。そして続く前期青銅器時代には、後期銅石器時代から上トラキア平野に居住していた同系統の集団が気候環境の回復に伴ってテルに再居住し、農耕牧畜を主生業とする定住生活を営むようになったと論じられている (Nikolova 2005: 91-92)。

(4) 仮説の問題点

ギンブタスの論考をはじめとする第1の仮説に関連した議論は、黒海北の草原地帯から東欧または中欧の一部さえも含めた非常に大きなスケールで展開されていたため、エゼロ文化の系統関係や形成過程の解明を目的とした研究が具体的な資料を用いて十分に行われてきたとは言い難い。また上トラキア平野においては、外来集団による暴力行為を示すような人骨資料が他の遺跡で検出されていないため、ユナツィテ遺跡の資料は当該地域では特異な事例であると言える⁷⁾。したがって、これを上トラキア平野における標準的な移住民仮説の資料として受け入れることはできない。

第2の仮説はブルガリア先史時代研究において、気候変動を文化変化の重要な要因として捉える契機となった。しかしながら、上トラキア平野における前期青銅器時代の始まりについては、仮説のなかで特に説明されることはなかった。

第3の仮説は前期青銅器時代直前の上トラキア平野における考古資料の不在を、生活形態及び生業の変化から解釈したものである。この仮説は結果的に正しいかもしれないが、資料が見つからないことを理論的な解釈の原理として持ち出しており、エゼロ文化と他地域の考古資料との比較検証が十分に行われなかった。

(5) エゼロ文化起源の研究

しかしながら上トラキア平野における前期青銅器時代の始まりに関する問題は、編年研究の中で少なからず言及されてきた。N. メルペルト (Merpert) らはエゼロ文化研究

の足がかりを築いたエゼロ遺跡調査報告書のなかで、エゼロ遺跡の前期青銅器時代前葉に当たるエゼロ A 段階をトロイ (Troy) 第 I 市より古く位置づけた。そして、中欧 (縄目文土器と石斧) と黒海北の草原地帯 (丘状墓) における諸文化の要素が、ブルガリア前期青銅器時代において同時に認められていると論じた (Георгиев и др. 1979: 497-523)。すなわち、エゼロ文化の源流は南方の小アジア、ギリシア、エーゲ海諸島ではなく、北方の中欧から黒海北域にあると考えたのである。

そこで注目されたのがルーマニア・ドナウ川下流域を中心に展開していたチェルナヴォダ III 文化である。同文化の資料がブルガリアで発見されるまで、メルペルトらはチェルナヴォダ III 文化とトロイ第 I 市の土器の形態的特徴に見られる類似性 (例えば横位管状把手) を評価し、エゼロ A 段階をチェルナヴォダ III 文化より古く年代付けた (Георгиев и др. 1979: 502)。一方、V. ネメイコヴァーパヴコヴァ (Němejcová-Pavková) は中欧のバーデン・ボラス文化の資料を基に、チェルナヴォダ III 文化とエゼロ A 段階を同時期として捉えた (Němejcová-Pavková 1982: 172, 1999: 51)。その後、チェルナヴォダ III 文化の遺跡がブルガリア北部と北東部を皮切りに上トラキア平野でも発見され、ブルガリアでの資料数が増加すると、チェルナヴォダ III 文化をエゼロ A 段階より古く位置付ける研究者の意見が優勢を占めるようになった (Lichardus und Iliev 2001: 174-175; Nikolova 1999: 175-198; Parzinger 1993: Beilage 3A-3B; Roman 2001: 18; Христова 2008)。例えば、P. ロマン (Roman) はチェルナヴォダ III 文化とエゼロ文化の新旧を示す証拠としてブルガリア西部のラドミル・ヴァホヴォ (Radomir Vakhovo) 遺跡 (図 1-29) を取り上げ、チェルナヴォダ III 文化がエゼロ文化に先行すると述べている (Roman 2001: 17)。しかしながら、チェルナヴォダ III 文化とエゼロ文化の時間的前後関係が層位学的所見によって裏付けられた事例はまだ確認されていない。また、ブルガリアとドナウ川下流域に分布するチェルナヴォダ III 文化遺跡の絶対年代も示されていない。一方、黒海北西地域から草原地帯の研究に従事する D. アンソニー (Anthony) と I. マンズラ (Manzura) によると、チェルナヴォダ III 文化の絶対年代は前 3600/3500 ~ 前 3100/3000 年におさまるといふ (Anthony 2007: 492; Manzura 2005: 316)。ただし、その絶対年代は必ずしもチェルナヴォダ III 文化の試料から直接得られた訳ではないため、両文化の編年関係は考古資料の型式学的分析から導かれた相対年代を含めて議論されている。

こうした動向のなか銅器時代から青銅器時代への移行は中欧や北方草原地帯とのつながりではなく、むしろ西アジア諸地域との関係で成立したと考える研究者もいる。そ

の背景には、前 4 千年紀半ば以降の近東における都市文化の展開とその広域にわたる影響が想定されている (Merkyte 2007: 53)。

もう 1 つの解釈として上述した第 3 の仮説がある。ニコロヴァと K. レシュタコフ (Leshtakov) は上トラキア平野における前期青銅器時代の始まりについて、外部からの影響ではなく内的要因説を提唱している (Nikolova 2001: 248; Лещаков 2006: 155)。また I. パナヨトフ (Panayotov) は将来的に上トラキア平野で移行期の遺跡が見つかる可能性に言及し (Панайотов 1984: 11)、遺跡不在の原因を単に調査不足に求めている。こうした主張はエゼロ文化が後期銅器時代から移行期を経て上トラキア平野で成立したと考えるものである。

このように研究史を概観してみると、エゼロ文化の起源を主題とした研究がこれまで十分に行われてこなかったことが分かる。そこでエゼロ文化の始まりを考察するためには、上トラキア平野におけるエゼロ A 段階の土器を基礎資料として、この段階に先行する資料と比較し、系統関係を検討する必要がある。

II. エゼロ文化の遺跡と周辺地域の諸文化

エゼロ文化の遺跡間における編年研究はこれまでに幾つか行われている (Лещаков 1997, 2006)。それによるとエゼロ A 段階の資料が発掘調査から得られた遺跡は、エゼロ、デヤドヴォ (Dyadovo)、カラノヴォ、カラスラ・ルプキテ・カレト (Karasura-Rupkite Kaleto) (以下カラスラと略す)、サディエヴォ (Súdievo)、オフチャリツァ (Ovcharitsa) II、ヴェセリノヴォ (Veselinovo)、そしてベレケトスカ・モギラ (Bereketska Mogila) 平地集団墓、ゴリヤマ・デテリナ (Golyama Detelina) II 号丘状墓と IV 号丘状墓である。集落遺跡はオフチャリツァ II を除いて全てテル集落である。カラスラ遺跡以外のテル集落では、前期青銅器時代層と後期銅器時代層とのあいだに間層が確認された。本稿ではエゼロ A 段階に比定されている遺跡のうち、公表資料の比較的多い遺跡 (エゼロ、デヤドヴォ、カラノヴォ、カラスラ、ベレケトスカ・モギラ平地集団墓、ゴリヤマ・デテリナ II 号丘状墓と IV 号丘状墓) を中心に取り上げる。

(1) エゼロ A 段階の遺跡概要

エゼロ遺跡は上トラキア平野北東部に位置する集落である。規模は 200 × 145m を測り、文化層は厚さ約 13m に及ぶ。集落は新石器時代から前期青銅器時代、そして古代と中世に営まれていた。このうち前期青銅器時代層は 13 枚を数え、古い順に XIII-IX 層はエゼロ A 段階、VIII-IV 層はエゼロ A/B 段階 ~ B1 段階、III-I 層はエゼロ B2 段階

に区分されている (Георгиев и др. 1979: 498)

デヤドヴォ遺跡はエゼロ遺跡から南に約 5km のところに位置している (図 1-3)。規模は 220 × 140m、文化層の厚さは最大で 18m を測る。試掘調査により後期銅器時代から中世の文化層および遺物が確認された (Катинчаров и др. 1980)。前期青銅器時代文化層 (厚さ 2.4m) は 16 層に分けられ、XVI ~ XIII 層がエゼロ A 段階に比定された。80 年代半ばから東海大学トラキア発掘調査団が、テル中央部の一画 (約 350m²) で前期青銅器時代集落の発掘調査を進めている。90 年代半ばから後半にかけて、デヤドヴォ遺跡における前期青銅器時代層の始まりを確認するために試掘調査が行われ、この時に出土した土器はエゼロ A 段階に比定されている (千本 2009)。

カラノヴォ遺跡はエゼロ遺跡から北西約 10km のところに位置している (図 1-2)。規模は約 250 × 180m、文化層の厚さは 12.40m を測る (Hiller und Nikolov 2000: 7)。ゲオルギエフらの調査 (1947 ~ 57 年) によって文化層は 7 つの時期に区分され、最上位の VII 期が前期青銅器時代に相当する。該期の文化層は 6 枚の建築層で構成され、厚さ約 2m を測る。そのうち下層の 3 枚は VIIa 期、上層の 3 枚は VIIb 期に細分された。レシュタコフは土器を基に VIIa 期をエゼロ A 段階に比定している (Лещиков 1997: 57)。ブルガリア-オーストリア隊の再調査 (1984 ~ 1992 年) により、前期青銅器時代層で 5 基の土坑が検出された。このうち 2 基の土坑から出土した土器はエゼロ A 段階と併行する VIIa 期に年代付けられた (Hiller 1997: 347)。

カラスラ遺跡は上トラキア平野中央部に位置し (図 1-4)、規模はおおよそ 160 × 150m、高さ 18m に及ぶ。遺跡は先史時代から中世にかけて断続的に営まれた。本遺跡ではテル北側に設置された調査区から、5 層の連続する建築層が検出され、最下層 (Wall I) がエゼロ A 段階に比定されている (Bertram 2002: 47)。

ベレケトスカ・モギラ平地集団墓遺跡は上トラキア平野

北東部に位置し (図 1-8)、集団墓の隣には先史時代のテル集落が存在する (Kalčev 2002)。集団墓の調査規模は 4000m² を測り、調査区から 78 基の土壙墓が検出された。副葬品の内容から 74 基の墓址がエゼロ A 段階に比定されている (Kalčev 2002: 44-45)。

ゴリヤマ・デテリナ II 号丘状墓と IV 号丘状墓は上トラキア平野東部に位置する (図 1-9、25)。II 号丘状墓は 46 × 41 m を測る円形プランを有し、高さ 4.6m に及ぶ。IV 号丘状墓は高さ 1.6m を測り、平面プランは長軸 30m の楕円形を呈する。II 号丘状墓から 34 基の土壙墓が検出され、副葬品の特徴と埋葬址の層位的な関係から、少なくとも 12 基 (18 ~ 19、24 ~ 28、30 ~ 34 号墓) がエゼロ A 段階に比定されている (Лещиков и Попова 1995: 69-86)。IV 号丘状墓では 5 基の土壙墓と 9 基の儀礼遺構⁸⁾ が調査された (Лещиков и Борисов 1995)。ここでは 2 号墓を除いて副葬品は認められなかったが、儀礼遺構から土器が出土している。報告によると、土壙墓と儀礼遺構は前期青銅器時代に年代付けられた。これらの丘状墓は墓制の特徴から、黒海北の草原地帯に原郷をもつヤムナ (Yamna) 文化または土壙墓文化 (Pit Grave Culture) に属すると考えられている。

(2) 周辺地域文化の概要

後期銅器時代から前期青銅器時代にかけて東欧に多くの考古文化が存在していたことが先行研究により明らかにされ、各文化の編年研究も継続的に行われてきた (例えば Nikolova 1999; Parzinger 1991; Todorova 1995)。その成果を基にした編年的枠組の略表を表 1 に、該期の東欧に代表的な文化の土器と遺跡分布を図 2 ~ 4 に示した。

後期銅器時代に後続する移行期にはブルガリア北西部のガラティン文化、北部のホトニツァ文化 (旧ペヴェツ文化) (図 2-11 ~ 16)、北東部とドナウ川下流域のチェルナヴォダ I 文化 (図 2-17 ~ 22)、そしてロドピ山脈のヤゴデ

表 1 編年表
(Тодорова 1986; Morintz und Roman 1968; Rassamakin 1999 をもとに筆者作成)

	ギリシア北部	ロドピ山脈	ブルガリア北西部	上トラキア	ブルガリア北部	ドナウ下流域・ブルガリア北東部	黒海北西部	アナトリア北西部
後期銅器時代	シタグリ III	KSB	KSB	KGKVI	KGKVI	KGKVI	ククテニ A	クムテベ I A ?
移行期	ラフマニ	ヤゴディナ	ガラティン	?	ホトニツァ	チェルナヴォダ I	ククテニ AB ククテニ B	クムテベ I B
前期青銅器時代	シタグリ IV	?	オルリヤ・サドヴェツ	チェルナヴォダ III カラノヴォ VIIa エゼロ A	チェルナヴォダ III	チェルナヴォダ III チェルナヴォダ II	ウサトヴォ	クムテベ I C トロイ第 I 市

KSB: クリヴォドル-サルクツァ-パニ・フム複合文化 KGKVI: コジャデルメン-グメルニツァ-カラノヴォ VI 複合文化

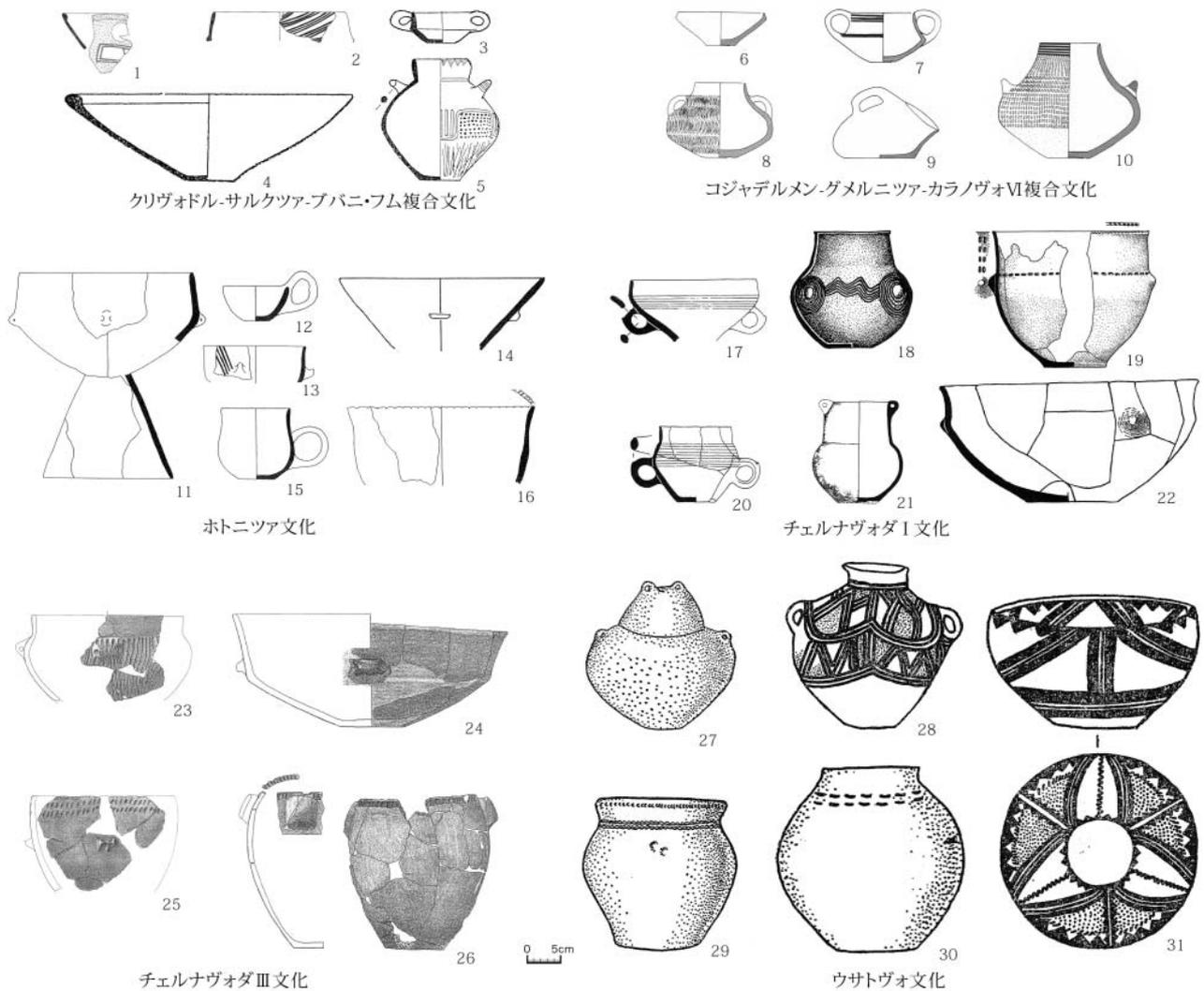


図2 後期銅石器時代から前期青銅器時代における各文化の土器 (S = 1/10)

(1-5 Georgieva 1988; 6-10 Petrova 2004; 11-16 Илчева 2002; 17-22 Manzura 1999; 23-26 Lichardus und Iliev 2001; 27-31 Пагокова 1979)

イナ文化が認められている。この他にギリシア北部のテッサリア地方ではラフマニ文化、アナトリア北西部ではクムテペ (Kumtepe) 遺跡 IB 段階、黒海北西地域ではククテニ AB 文化と B 文化が展開していた。

前期青銅器時代初頭のドナウ川下流域から上トラキア平野とブルガリア西部にかけてチェルナヴォダ III 文化 (図 2-23 ~ 26) が拡がり⁹⁾、黒海北西地域にはククテニ文化の衰退後にウサトヴォ文化 (図 2-27 ~ 31) が登場する。続けて上トラキア平野にエゼロ文化、ドナウ川下流域からブルガリア北東部の沿岸地域にかけてチェルナヴォダ II 文化、ブルガリア北西部にオルリャ・サドヴェツ文化、ギリシア北部にシタグリ (Sitagroi) 遺跡 IV 層併行の遺跡が分布する。

チェルナヴォダ III 文化とウサトヴォ文化は一連の文化

の中でも、エゼロ文化直前段階に上トラキア平野とその周辺地域で展開していたため特に注意を要する。チェルナヴォダ III 文化の標識遺跡であるチェルナヴォダ (Cernavoda) 遺跡は、ドナウ川右岸のデヤルル・ソフィアと呼ばれる丘の上に位置する。当遺跡の調査区 (A、B、C/D) から出土した土器を基に、チェルナヴォダ I、II、III という 3 つの文化が設定された (Morintz und Roman 1968: 47-115)。

チェルナヴォダ諸文化の集落構造はまだ十分に明らかにされていない。これらの文化期にテルを利用した生活痕跡が散発的に確認されているものの、全体的には文化層の薄い集落の存在が優勢を占め、集落は簡素な造りの平地式と半堅穴式の住居で構成される。そのため、チェルナヴォダ諸文化では移動性の高い牧畜生活が営まれていたと考えられている (Morintz und Roman 1968: 97; Manzura 1999:

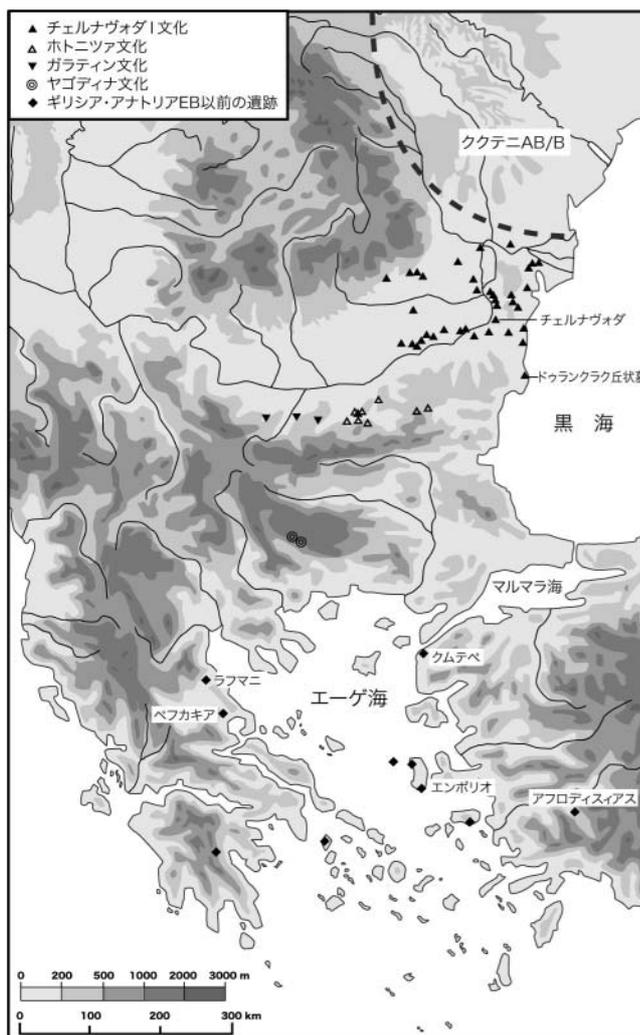


図3 移行期の遺跡分布図

(*ギリシアとアナトリア〔クムテベ遺跡を除く〕の遺跡分布に関しては孔列土器の出土状況を示す。これらの遺跡には新石器時代と銅石器時代に属するものも含まれる。)

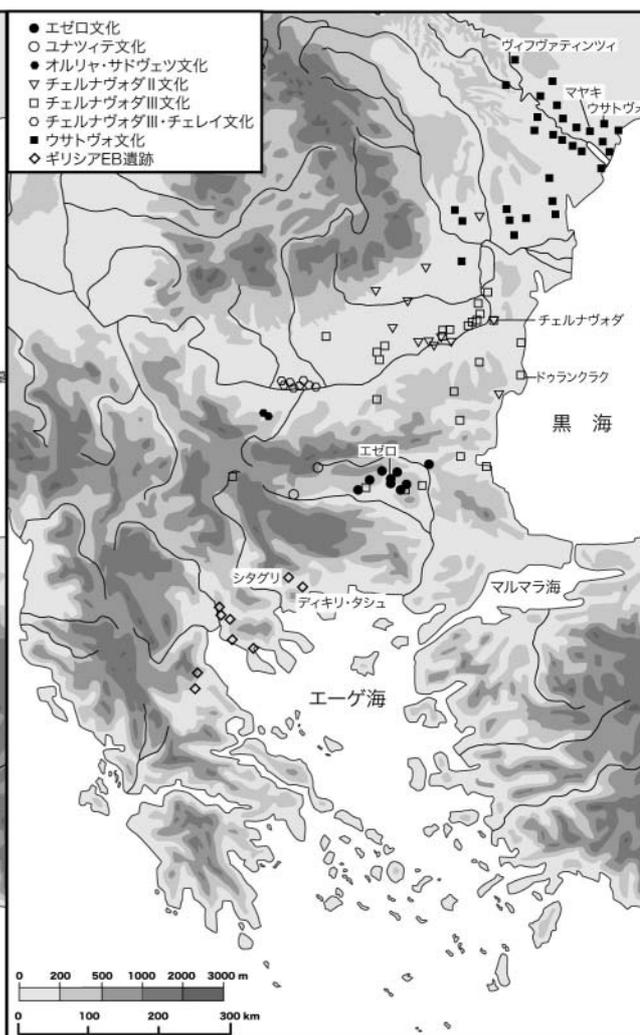


図4 前期青銅器時代の遺跡分布図

(*ギリシアの遺跡分布に関しては孔列土器の出土状況を示す。)

(Aslanis 1985; Coleman 1977; Hanschmann und Milojevic 1976; Joukowsky 1986; Manzura 2003; Morintz und Roman 1968; Petrakis 2002; Sampson 2002; Tončeva 1981; Weisshaar 1989; Дергачев 1978; Збенович 1974 をもとに筆者作成)

115)。埋葬址については、チェルナヴォダ I 文化の丘状墓 (ドゥランクラク (Durankulak) 遺跡など) と、平地集団墓 (ブライリツァ (Brăilița) 遺跡など) の事例が比較的まとまった資料として知られている。一方チェルナヴォダ III 文化に関しては、埋葬址が数基確認されている程度であり、全体的な様相を知る手がかりは得られていない。

ウサトヴォ文化はチェルナヴォダ III 文化と併行し¹⁰⁾、遺跡の分布は黒海北西地域に集中している (Manzura 2003: Fig. 13; Збенович 1974: Рис. 1)。代表的な遺跡にはウサトヴォ (Usatovo) 遺跡とマヤキ (Mayaki) 遺跡が挙げられる。ウサトヴォ遺跡は丘状墓と平地集団墓、集落址で構成され、集落内の住居は石壁をもつ地上式が採用された。ウサトヴォ遺跡は黒海北西域内陸部の終末期トリポリ

エ文化 (精製彩文土器)、草原文化 (粗製縄目押圧文土器、胎土に貝殻を混和する土器、丘状墓)、そしてチェルナヴォダ III 文化 (管状把手付土器) のつながりを示す資料を有している (Manzura et al. 1995: 20; Патокова 1979: 160)。丘状墓の外観は円墳状で、土壇墓を築いてから土を盛り、環状列石や葺石が採用されることもある。また構築土に追葬や儀礼を行った痕跡も検出されている。丘状墓の副葬品としてヒ素銅製の武具や装身具などが出土していることから、ウサトヴォ文化は周辺地域に強い影響力をもった首長制社会を形成していたと考えられている (Anthony 2007: 349-359)。各文化の相互関係については、ブルガリア北部にホトニツァ文化を設定したマンズラが土器の型式学的特徴を通して、ホトニツァ文化→チェルナヴォダ III

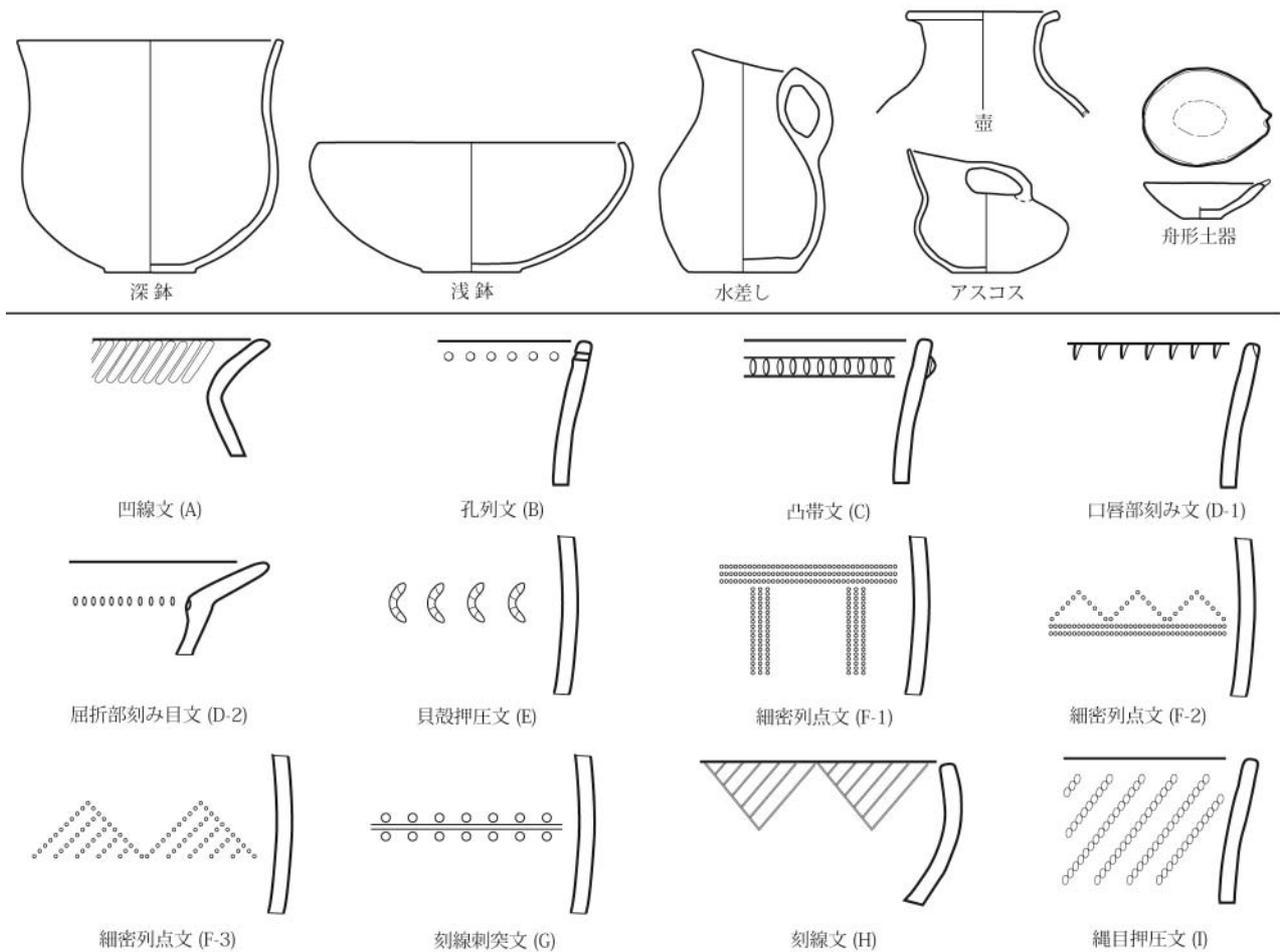


図5 エゼロ A 土器の器種と装飾の概念図

文化、チェルナヴォダ I 文化→ウサトヴォ文化という2つの系統関係を提示した (Manzura 2003: Fig. 13)。ただしウサトヴォ文化に関する結論は、具体的な資料を取り上げて提出されたものではなかった。

Ⅲ. 基礎資料の提示と分類

(1) エゼロ A 土器の器種・器形

エゼロ A 土器の基本組成はその形態的特徴から、深鉢、浅鉢、水差し、壺に区分される (図5, 6)。さらに、一部の遺跡ではこれらの器種に舟形土器とアスコス¹¹⁾が加わる。深鉢は断面が滑らかな S 字状を描く粗製のものが多い (図6-1～3)。また口縁部が強く外反する深鉢 (図6-4) も比較的多く出土する。浅鉢 (図6-5～7) は断面形が半球形を呈し、内反口縁をもつものが多い。口縁部が外側に屈折する浅鉢はカラノヴォ遺跡にのみ認められる特徴的な器形である (図6-6)。水差しは丸みのある胴部と外側に張り出した注ぎ口をもち、把手は注ぎ口の反対側に1つ付いている (図6-8～9)。水差しと類似した胴部と把手、やや広口で側面観が水平位の口縁部をもつ壺形の土器も認められるが、本稿ではこれを「水差し様土器」と呼ぶことにする

(図6-10)。アスコスは水差しを横倒しにしたような形態を呈している。口縁部は肩部からやや急に立ち上がり、その側面観は注ぎ口に向かって上方に傾斜する (図6-11)。壺は、おそらく丸みのある胴部、幅の狭い頸部と外反する口縁部をもつ (図6-12)。舟形土器は平面観が楕円形を呈する浅い平底の容器である (図6-13)。

アスコス、水差し、水差し様土器といった水差し類土器と浅鉢は、ベレケトスカ・モギラ集平地団墓遺跡とゴリヤマ・デテリナ II 号丘状墓の副葬品を構成する主要な土器である (Kalčev 2002: 23; Лещиков и Попова 1995: 69-71, 77)。ゴリヤマ・デテリナ IV 号丘状墓の儀礼遺構では副葬品と同じ器種は検出されず、代わりに深鉢や壺、縦位の管状把手をもつ小形鉢が見ついている (図10-7, 8)。

(2) エゼロ A 土器の装飾要素

エゼロ A 土器の装飾は大きく9つのグループに分けられる (図5) ; A : 凹線、B : 孔列、C : 凸帯、D : 刻み目、E : 貝殻押圧 F : 細密列点、G : 刻線刺突、H : 刻線、I : 縄目押圧。このうち幾つかの装飾要素は組み合わせられて施文される場合がある。該期にはグラフィイト彩文土器

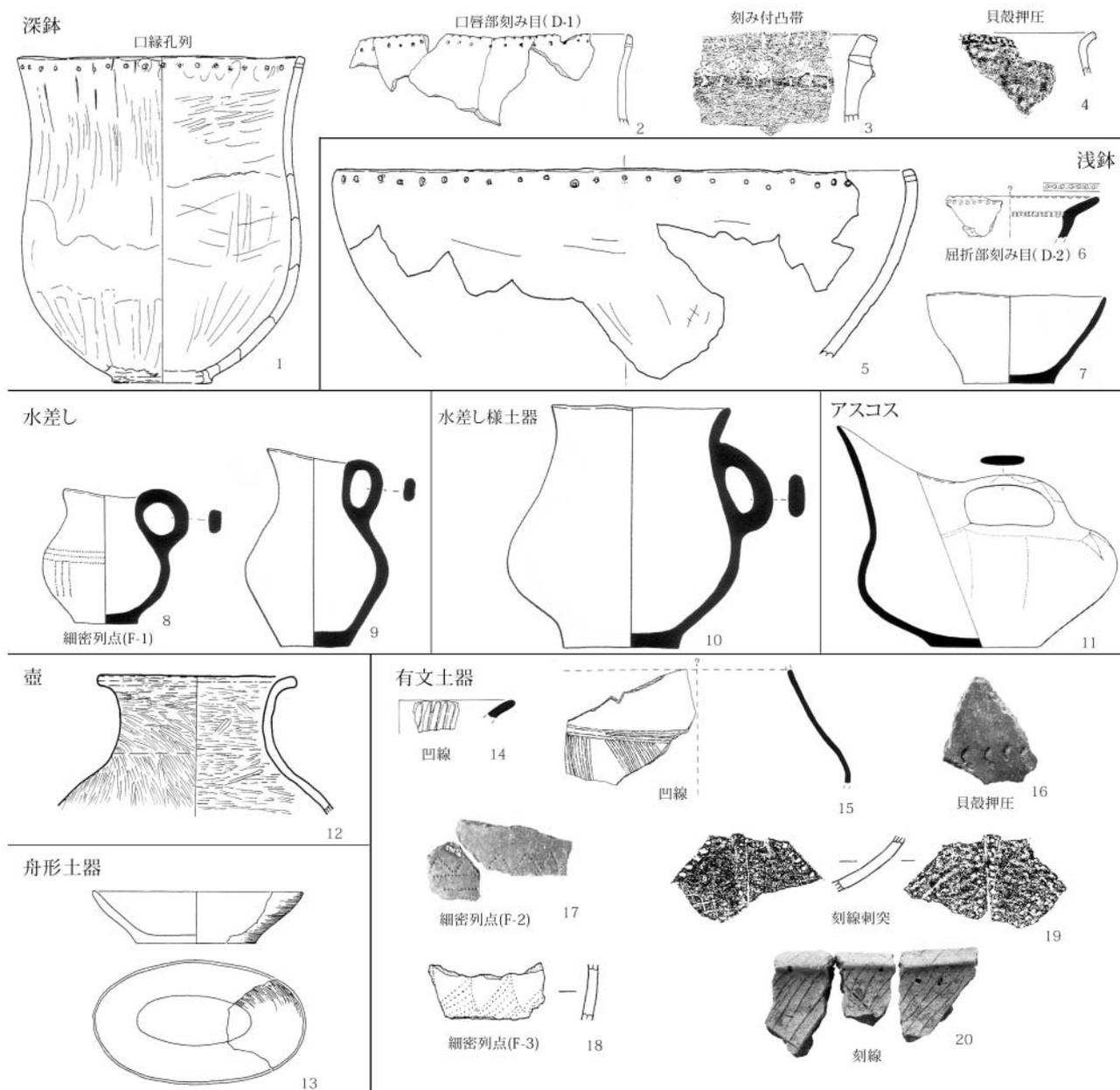


図6 エゼロ A 土器の器種・器形と装飾要素 (16, 17 : S=1/3 14, 18, 20 : S=1/4 それ以外 : S=1/6)

(1, 3, 5, 19: 関根・禰編 1999; 2, 4, 18 関根・禰編 2000; 6, 14, 15 Hiller 1997; 7-11 Kalčev 2002 をもとに一部改変; 12 禰編 2005; 13 Leshtakov, Kancheva-Russeva and Stoyanov 2001; 16, 17, 20 東海大学トラキア発掘調査団より提供)

など後期銅石器時代の典型的な文様は認められない(図2-1~10)。

凹線文(A)は幅広の浅い沈線装飾で、エゼロ A 段階では縦位か斜位の凹線が直線状に施される。凹線文は該期の示標となる装飾として取り上げられているものの、多くは上トラキア平野西部で確認され、平野東部での出土量は限られている(Лещakov 2006: 170)。その中でもエゼロ遺跡では凹線文が口縁部内面にしか施されないが、カラノヴォ遺跡では胴部外面にも施される(図6-14, 15)。

孔列文(B)は主に深鉢と浅鉢の口縁部に施され、ほぼ

一定の間隔で口縁部を全周する(図6-1~3, 5)。施文具には通常径が1cm前後の棒状のものが使用された。口縁部の孔列はエゼロ A 段階の全ての遺跡で出土しているが、例外的にカラノヴォ遺跡では確認されていない(Hiller 1997: 324-330)。

凸帯文(C)には刻みや押圧、刺突を伴うものと伴わないものが存在する(図6-3)。1条の横位凸帯を口縁部に施文する資料が多く見受けられる。前期青銅器時代前葉の凸帯文は孔列文や口唇部刻み文に比べると少量であるが、時期が下るにつれ徐々に増加する傾向にある。カラノヴォ遺

跡の凸帯文土器は僅かである。

刻み目文 (D) には先端が三角形か四角、または丸みのある施文具が用いられる。土器の口唇部を連続して刻み目をつける装飾 (D-1) は、孔列と凸帯と共にはほぼ全てのエゼロ A 集落で観察される (図 6-2)。カラノヴォ遺跡の口縁屈折浅鉢は頸部内面に連続刻み装飾 (D-2) が施文されている (図 6-6)。

貝殻押圧文 (E) は貝殻の背を器面に押しつけて文様を施す装飾である。三日月状の押圧が胴部に施文される深鉢 (図 6-16) と、外反する縁端部に文様をもつ深鉢はデヤドヴォ遺跡で観察された (図 6-4)。複雑な文様はなく、列状の単純なモチーフが採用されている。

細密列点文 (F) は径 1~2mm の細かい円形刺突を列状に配置した装飾である。多くは肩部から胴部にかけて施文される。文様には 2~4 条の横位列点とそれに直交する同じく 2~4 条の縦位列点文 (F-1) と三角文 (F-2)、そして斜めに列点を充填した三角文 (F-3) が特徴的な事例として挙げられる。F-1 はエゼロ遺跡の水差し、デヤドヴォ遺跡の小形鉢、そしてベレケトスカ・モギラ平地集団墓遺跡の水差しとアスコスに施文されている (図 6-8; 図 9-9)。F-2 と F-3 (図 6-17, 18) の他に、カラノヴォ遺跡では文様は明らかではないが、細密列点文をもつ破片試料が数点確認されている (Hiller 1997: Taf. 145-9, 11, 148-20)。

刻線刺突文 (G) は 1 本の刻線の両側あるいは片側に列点を刺突した装飾である。土器の口縁部か胴部に直線状の文様が配される (図 6-19)。この種の装飾はエゼロ遺跡やデヤドヴォ遺跡などから出土し、主に横位及び縦位に施される直線状の文様と幾何学文で構成される。

刻線文 (H) は先端の細い施文具で口縁部から胴部に施文される。この主要な文様は斜線充填された逆三角形のモチーフであり、デヤドヴォ遺跡の浅鉢に施文されている (図 6-20)。

縄目押圧文 (I) は土器の器面に撚った縄目を回転押圧するのではなく、原体をそのまま押し当てて文様を施す装飾である。この装飾に関してはエゼロ遺跡 A 段階前半で浅鉢への施文が僅かな事例として報告されている (Георгиев и др. 1979: Таб 151, 152) が、その文様構成は明らかではない。エゼロ遺跡の事例によると、縄目押圧文の種類と数はエゼロ A 段階後半以降に増加する。

エゼロ A 段階の土器内容を概観した上で、カラノヴォ遺跡の資料について少し言及しておく。カラノヴォ遺跡 VIIa 期の土器は、エゼロ遺跡をはじめとする他のエゼロ A 土器とはやや異なる様相を呈している。これ以降エゼロ A 土器とカラノヴォ遺跡の土器を区別するために、カラノヴォ遺跡資料をエゼロ A 土器として一括せず、別個のものとして記載する。カラノヴォ遺跡の土器とエゼロ A 土

器の共通点には、凸帯文と口唇部刻み目文、そして細密列点文が観察されている。反対に主な相違点として、カラノヴォ遺跡ではエゼロ A 土器に特徴的な孔列土器が認められない点と、凹線文の種類と数がエゼロ A 土器よりも多く存在する点が挙げられる (Георгиев и др. 1979: Таб. 166 тип 39)。エゼロ遺跡やデヤドヴォ遺跡がカラノヴォ遺跡の近隣に位置することから、土器内容の相違を地域差として理解することはやや困難である。後述するように本稿ではこれを時期差として捉え、カラノヴォ遺跡資料をエゼロ A 段階のなかで古く年代付けることが可能であると考えるが、詳細については周辺地域の資料を含めて検討を行ったうえで述べることにする。

IV. 周辺地域資料との比較

(1) ギリシア・アナトリア地域

はじめに南方との関係について言及すると、上トラキア平野と接するロドピ山脈のヤゴディナ文化とアナトリア北西部のクムテベ遺跡 IB 層では、エゼロ A 土器との類例は特に認められない (Sperling 1976; Аврамова 1992: 51)。いずれもエゼロ A 土器との関連性は極めて弱いものと思われる。

さらに南のギリシアとアナトリア南西部には、エゼロ A 土器に観察された凹線文土器と孔列土器が存在する。凹線文はエゼロ A 段階と併行するギリシア北部のシタグリ遺跡 IV 層から出土している。シタグリ遺跡の凹線文は全て土器外面に施されており、エゼロ遺跡のように口縁部内面の装飾は確認されていない (Sfriads 2001: 116; Sherratt 1987: Fig. 13-1, 2, 4, 5)。

孔列土器はギリシアのテッサリア地方、マケドニア地方、エーゲ海諸島、そしてアナトリア南西部を中心に分布している (図 3, 4, 7)。その期間は前 5 千年紀前半から前 3 千年紀終わりの前期青銅器時代終末まで及ぶ (Eslick 1992: Chart 4, 101; Hood 1981: 80)。したがってこの地域における孔列土器の初現は、上トラキア平野の事例よりも古くなる。このことからエゼロ A 段階の孔列土器が南方から伝播したという可能性が浮かび上がってくるのだが、この所見を確定するような孔列土器はほとんど見当たらない。対比可能な資料として、後期銅石器時代後半段階から移行期に併行するテッサリア地方のペフカキア (Pevkakia) 遺跡中層と下層、キオス島のエンポリオ (Emporio) 遺跡、アナトリア南西部のアフロディシアス (Aphrodisias) 遺跡 VIID 層の資料が挙げられる (Hood 1981: Fig. 141-431~434; Joukowsky 1986: Tab. 138; Parzinger 1991: Abb. 7; Weisshaar 1989: Taf. 145) が、この点については北方の事例を参照したのちに検討したい。

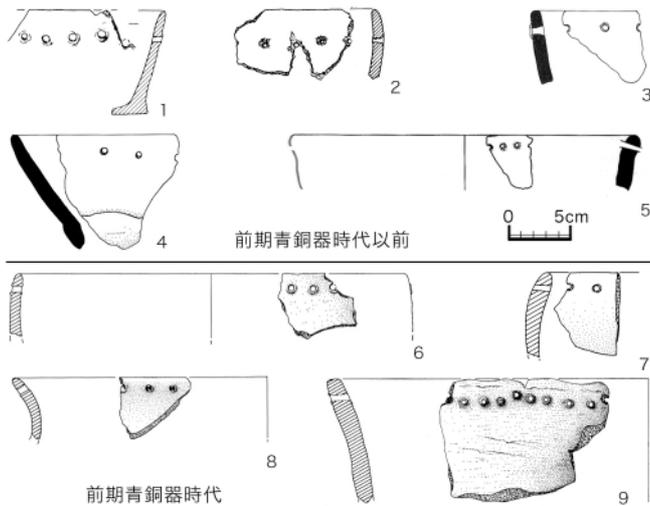


図7 ギリシア・トルコの孔列土器

1：エンポリオ（X-VII）2：エンポリオ（VII-VI層）3：ペフカキア（中層）4：ペフカキア（下層）5：アフロディシヤス（VII D層）6：カスタナス（26層）7：クリツァナ 8：ハギオス・ママス 9：アクスイオホリ

(1-2 Hood 1981; 3 Weisshaar 1989; 4 Christmann 1996; 5 Joukowsky 1986; 6-9 Aslanis 1985)

(2) 北ブルガリアとドナウ川下流域

移行期のガラティン、ホトニツァ、チェルナヴォダ I 文化の土器は後期銅石器時代の伝統をある程度維持しつつも、独自の特徴を備えている（図 2-11～22）。その中で移行期文化からチェルナヴォダ III 文化とエゼロ A 段階に認められる装飾要素は凸帯文（C）、口唇部刻み目文（D-1）、刻線刺突文（G）である。横位凸帯文（C）はチェルナヴォダ I 文化、ホトニツァ文化、チェルナヴォダ III 文化で観察され（図 8-2, 6）、なかでも刻み付凸帯文はチェルナヴォダ III 文化の土器装飾の中で優勢を占めている。口唇部刻み目文（D-1）は後期銅石器時代の北ブルガリアやドナウ川下流域においてほとんど見受けられないが、移行期文化に多く施文されることから移行期以降に特徴的な装飾要素と言える（Georgieva 1988 Abb. 19-14, 15; Manzura 2003 Fig. 9; Илчева 2002 Таб. 51-1, 57-7）。さらにこの装飾はチェルナヴォダ III 文化においても顕著に認められる（図 8-3, 7）（Manzura 2003 Fig. 11）。刻線刺突文（G）はクリヴォドル-サルクツァ-ブバニ・フム複合文化とチェルナヴォダ I 文化では知られていないが、ホトニツァ文化とチェルナヴォダ III 文化にその存在が確認されている

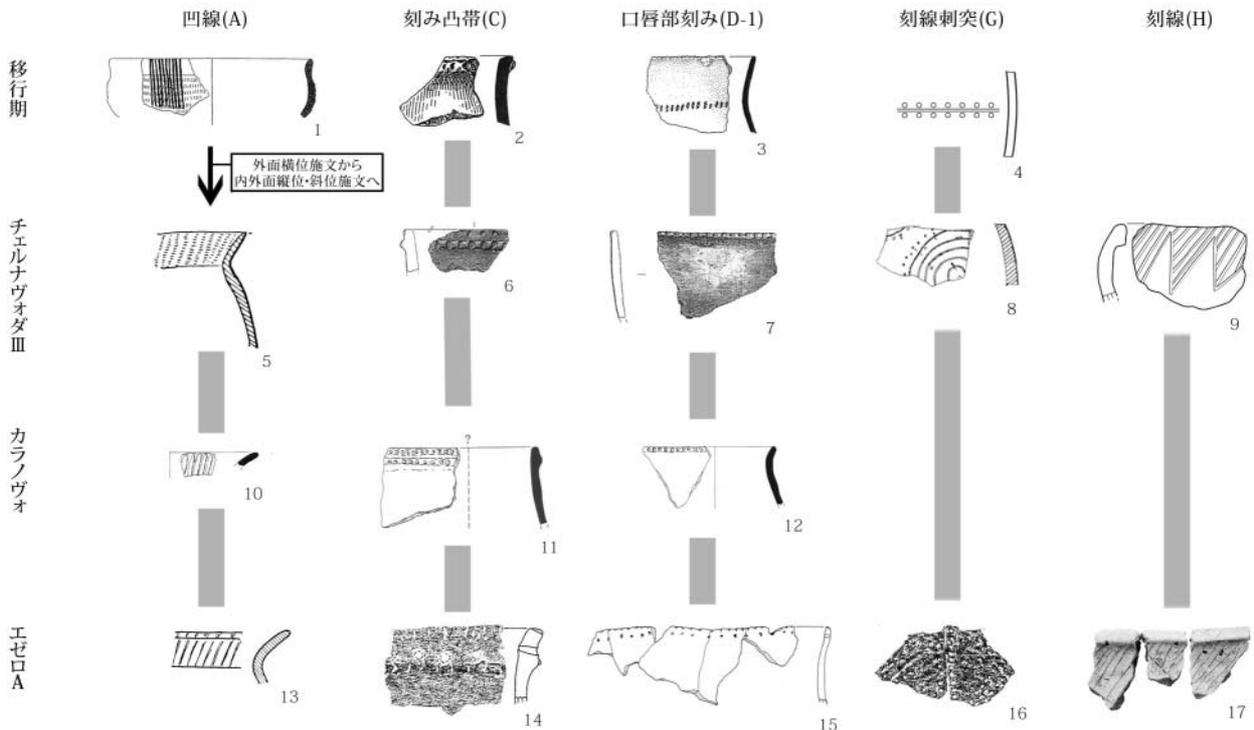


図8 移行期からエゼロ A 段階の装飾要素〔チェルナヴォダ III 系〕（縮尺不同）

(1 Илчева 2002; 2-3 Manzura 1999; 4 Manzura 1999 をもとに筆者作成; 5, 8 Morintz und Roman 1968; 6-7 Lichardus und Plev 2001; 9 Драганов 1990; 10-12 Hiller 1997; 13 Георгиев, Мерперт и др. 1979; 14, 16 関根・禿編 1999; 15 関根・禿編 2000; 17 東海大学トラキア発掘調査団より提供)

(図8-4, 8) (Manzura 2003 Fig. 10; Morintz und Roman 1968: Abb. 29-20)。

チェルナヴォダ III 文化とエゼロ A 文化に共通して観察される文様要素は凹線文 (A) と刻線文 (H) である。凹線文 (A) に関しては移行期における胴部外面の横位凹線文 (図8-1) が、チェルナヴォダ III 文化で口縁部内面あるいは胴部外面への縦位か斜位の凹線文へと変わる (図8-5)。縦位と斜位の凹線文を内面と外面に施文する事例はカラノヴォ遺跡に、口縁部内面の施文事例はエゼロ A 土器に看取される (図8-10, 13)。刻線文 (H) に関しては、斜線充填三角文はドゥランクラク遺跡 IIa 層から (図8-9) (Драганов 1990 Фиг. IV-3, 11)、またカラノヴォ遺跡の口縁屈折刻み目文をもつ浅鉢 (D-2) (図6-6) はブルガリア北部のコプリヴェツ (Koprivets) 遺跡から出土しており (Nikolova 1996: 156, Fig. 8: 4, 5)、どちらの遺跡もチェルナヴォダ III 文化に比定されている。

エゼロ A 段階に典型的な孔列土器 (B) は、ブルガリア北西部のサドヴェツ-カレ (Sadovets-Kale) 遺跡の後期銅石器時代層から1点出土している (Merkyte 2007 Pl. 11-5)。同遺跡の前期青銅器時代層からは数点の孔列土器が出土しているため (Merkyte 2007 Pl. 13-3, 8)、この層はエゼロ A 段階併行に比定されている (Todorova 1992: 373, Abb. 14-14, 20, 21, 23)。このことからブルガリア国内では、移行期以前の孔列土器が後期銅石器時代で僅か1点しか確認されていないことになる。

縄目押圧文 (I) はチェルナヴォダ I 文化とウサトヴォ文化に特徴的な装飾であるが、ホトニツァ文化ではわずかに数点しか見つかっていない (Manzura 2003: 328; Vajsov 1993: Abb. 13-2)。チェルナヴォダ III 文化についても、ドナウ下流域に分布する遺跡で僅かな出土例が知られているものの (Morintz und Roman 1968: 100, 111)、ブルガリア国内ではまだ発見されていない (Lichardus und Iliev 2001: 166-173; Христова 2008)。チェルナヴォダ I 文化とウサトヴォ文化に典型的な三日月状モチーフと、いわゆる「イモムシ」モチーフはチェルナヴォダ III 文化とエゼロ A 文化では採用されなかった。

上述の装飾要素のうち凸帯文 (C)、口唇部刻み目文 (D-1)、刻線刺突文 (G) は移行期文化からチェルナヴォダ III 文化を経てエゼロ A 段階へ、もう一方の縦位・斜位の凹線文 (A) と斜線充填逆三角形モチーフの刻線文 (H) は、チェルナヴォダ III 文化を経てエゼロ A 段階に継続して見られる (図8)。口唇部刻み目文はウサトヴォ文化にも少量認められるものの、ここに挙げたエゼロ A 段階の土器装飾要素 (A, C, D-1, H, G) は全て、チェルナヴォダ III 文化とのつながりを示していることから、これをチェルナヴォダ III 系の装飾とする。刻み目付き口縁屈折

浅鉢 (D-2) に関しては、エゼロ A 土器に認められていないためチェルナヴォダ III 系要素から除外したが、チェルナヴォダ III 文化とカラノヴォ遺跡の関係を考える上で有効な資料である。

(3) 黒海北西地域

孔列土器 (B) はギリシアとアナトリア南西部、ブルガリア北西部のほか、黒海北西地域のウサトヴォ遺跡とマヤキ遺跡で副葬品として確認されている (図9-2)。黒海北西地域における孔列土器の事例を含めると、上トラキア平野から出土した孔列土器の起源地として3つの候補が挙げられることになる。1つ目はブルガリア北西部、2つ目はギリシア・エーゲ海諸島・アナトリア南西部を一括した南方地域、3つ目は黒海北西地域である。北西ブルガリアにおいては後期銅石器時代の孔列土器が移行期のガラティン文化で消失するため、孔列土器がエゼロ A 段階に直接受け継がれたとは考えにくい。

2つ目の南方地域については、孔列土器がテッサリア地方以南に位置し、後期銅石器時代後半から移行期に併行する3遺跡で確認された。一方、この時期のエーゲ海北岸地域とギリシア・マケドニア地方、そしてトルコ北西部、ロドピ山脈での出土例は未確認である。この地域のなかで孔列土器が登場するのは、エゼロ A 段階後半以降のエーゲ海北岸地域でのことである (Aslanis 1985: 204-320)。つまり孔列土器は移行期からエゼロ A 段階前半までの間、テッサリアの北からロドピ山脈の間では発見されていない。さらにエーゲ海北岸地域のシタグリ遺跡とディキリ・タシユ (Dikili Tash) 遺跡では、後期銅石器時代と前期青銅器時代との間に層位的・文化的な断絶が発掘調査により観察されており、この地域における断絶期の様相は明らかにされていない。

以上の点を考慮すると、南方地域及びブルガリア北西部に上トラキア平野の孔列土器の系統性を説明することのできる資料は、現段階において十分に揃っていない。その点で3つ目のウサトヴォ文化に関しては、前2つの候補地に比べると上トラキア平野との距離はややひらくものの、エゼロ A 段階との時間的關係は近い。このことから孔列土器が黒海北西地域に由来する可能性は、3つの候補地のなかでは比較的高いものと見なすことができる。

一方、エゼロ A 段階の貝殻押圧文 (E) と細密列点文 (F) は周辺地域の移行期文化、チェルナヴォダ III 文化、ウサトヴォ文化では採用されていない。しかし文様構成に着目してみると、貝殻押圧による三日月文 (e)¹²⁾ が縄目押圧によって施文された土器はチェルナヴォダ I 文化とウサトヴォ文化 (図9-1～3) (Manzura 1999: Fig. 7.8.4; Патокова 1979: Рис. 30-4, 17, 18, 21, 31-3) に、そして f-1

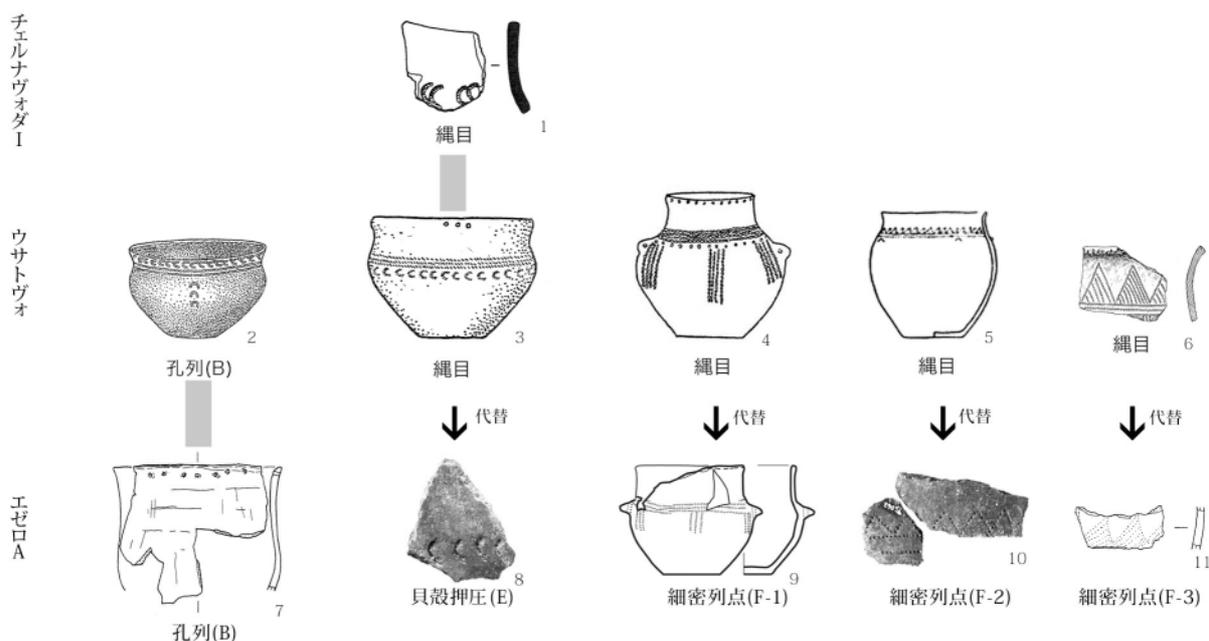


図9 移行期からエゼロ A 段階の装飾要素〔ウサトヴォ系〕(縮尺不同)

(1 Manzura 1999; 2-4 Патокова 1979; 5 Дергачев 1978; 6 Збенович 1974; 7 関根・禰編 1999; 8, 10 東海大学トラキア発掘調査団より提供; 9 東海大学トラキア発掘調査団 1996 をもとに筆者再トレース; 10 関根・禰編 2000)

と f-2 文様構成が縄目押圧によって施文された土器はマヤキ遺跡とドニエステル川左岸に位置するヴィフヴァティンツイ (Vykhvatintsi) 平地集団墓遺跡の副葬品に観察される (図 9-4, 5) (Дергачев 1978: Рис. 9-19, 10-16, 11-1, 8; Патокова 1980: Рис. 1-3, 2-4; Патокова и Петренко 1989: Рис. 20-1, 7, 11, 15, 27-3, 7, 8)。f-3 文様構成をもつ縄目押圧文土器はウサトヴォ集落遺跡と、チェルナヴォダ III・チェレイ文化のオルリヤ (Orlea) 遺跡において見て取ることができる (図 9-6) (Morintz und Roman 1968: Abb. 45-2; Збенович 1974: Рис. 4-1)。

エゼロ A 段階の貝殻押圧文 (E) と細密列点文 (F-1~3) が、ウサトヴォ文化における縄目押圧文土器の文様構成 (e, f-1~3) と共通している点は注目する。これに先の孔列土器 (B) をウサトヴォ文化要素の事例として含めて、エゼロ A 段階の装飾要素 (B, E, F-1~3) をウサトヴォ系の資料とする (図 9)。

(4) 葬送儀礼関連の遺構から出土したエゼロ A 土器とその比較

チェルナヴォダ III 文化とウサトヴォ文化の影響を考察するための補足資料として、上トラキア平野に認められる副葬品と儀礼に用いられた土器を取り上げる。前期青銅器時代の上トラキア平野には、丘状墓 (ゴリヤマ・デテリナ II 号丘状墓と IV 号丘状墓) と平地集団墓 (ベレケトスカ・モギラ遺跡) が分布している。同平野では埋葬址を構成する特徴が後期銅石器時代と前期青銅器時代で異なっ

おり、その顕著な違いは特に副葬品にあらわれている。後期銅石器時代では広口の浅鉢と蓋を副葬する事例が多く見受けられるが、前期青銅器時代では水差し類土器と内反口縁をもつ浅鉢が優勢であり、埋葬伝統の相違が窺える。一方、管見にふれたところ、周辺の移行期文化やギリシア北部の諸文化では、エゼロ A 段階のような水差し類土器を副葬品にもつ埋葬址 (チェルナヴォダ遺跡の事例を除く) を確認することはできなかった。

上トラキア平野における後期銅石器時代の土器伝統は全体としてエゼロ A 土器に引き継がれることはなかったが、例外的にアスコスは両時期に認められる。アスコスは注ぎ口とその反対側に把手の付く口縁部高の違いにより、2つのタイプに分類できる。ここでは把手側の口縁部高より注ぎ口のほうが高いものを A タイプ、それに対して低いものを B タイプと仮称する。A タイプはエゼロ A 段階の上トラキア平野 (カラノヴォ、エゼロ、ベレケトスカ・モギラ平地集団墓) (図 6-11) に、B タイプは後期銅石器時代のブルガリア国内及び周辺地域に分布する (図 2-9) (Marinescu-B1cu 1990: Figs. 1-6; Колева 1993: Обр. 1-6)。移行期のチェルナヴォダ I 文化には A タイプのアスコスが、チェルナヴォダ遺跡の埋葬址から鉢と共伴して出土している (図 10-1)。同じ A タイプのアスコスはベレケトスカ・モギラ平地集団墓遺跡でも副葬品として発見されている。同じ形態を呈したアスコスという特異な器種を副葬品として採用する点で、両遺跡間に共通性が窺える。ただしチェルナヴォダ遺跡のアスコスは、その形態的特徴から前



図10 副葬品および儀礼に使用された土器 (*1は縮尺不同)

1: チェルナヴォダ遺跡 2・3: ウサトヴォ1・12号丘4号墓 4: マヤキ3号丘5号墓 5: ベレクトスカ・モギラ集団墓70号墓 6: ゴリヤマ・デテリナII号丘31号墓 7: ゴリヤマ・デテリナIV号丘儀礼土坑No.3 8: ゴリヤマ・デテリナIV号丘儀礼土坑No.1
(1 Manzura 1999; 2-3 Патокова 1979; 4 Патокова 1980; 5 Kalčev 2002; 6 Кънчев 1995; 7-8 Лещаков и Борисов 1995)

期青銅器時代に年代付けられる可能性も指摘されている (Manzura 1999: 116)。

水差しは後期銅石器時代のブルガリア北部に位置するテリシュ (Telish) 遺跡をはじめ (Gergov 2007: Abb. 3)、ギリシア本土とエーゲ海諸島、アナトリア西部でエゼロ A 段階に先行して観察されているが、それらは概して副葬品として出土したものではない。一方、黒海北西地域のウサトヴォ遺跡とマヤキ遺跡では、水差しと水差し様土器が副葬品として少量ながら検出されている (図 10-2 ~ 4) (Патокова 1979: Рис. 29-5, 10; Патокова и Петренко 1989: Рис. 22-11)。このほかにウサトヴォ文化の副葬品の土器に施文された縄目押圧文が、ベレクトスカ・モギラ平地集団墓遺跡の水差しに施文される f-1 文様構成と類似する点も注目値する (図 6-8)。このことからウサトヴォ文化とエゼロ A 文化との関連性は、副葬品に採用される水差し類土器と副葬品の土器に施文される f-1 文様構成を通して認めることが可能である。ただし、これらの器種や文様構成は移行期文化やチェルナヴォダ III 文化で副葬品として採用されることはなかった。

さらに興味深い事例として、ゴリヤマ・デテリナ IV 号丘状墓が挙げられる。ここでは水差し類土器ではなく、儀礼遺構 No. 3 から縦位管状把手をもつ小鉢が出土している (図 10-7)。調査者によると、この土器は前期青銅器時代第 3 段階 (エゼロ B 段階 併行) に比定されている (Лещаков и Борисов 1995: 14)。横位管状把手をもつ土器はエゼロ A 段階後半以降に上トラキア平野をはじめ、アナトリア北西部のトロイ遺跡でも数多く出土しているが、縦位管状把手はチェルナヴォダ III 文化に特徴的なタイプである (Morintz und Roman 1968: Abb. 26-13, Abb. 35-9, 13)。したがって、ゴリヤマ・デテリナ IV 号丘状墓の縦位管状把手付土器はチェルナヴォダ III 文化に属すると

考えられる (Lichardus und Iliev 2001: 175)。儀礼遺構 No. 3 は丘状墓の構築土中で発見された儀礼遺構 No. 1 の上層に位置する。儀礼遺構 No. 1 では 2 点の土器が検出され (図 10-8)、これを基に本遺構は暫定的に前 4 千年紀終末から前 3 千年紀初頭に年代付けられている (Лещаков и Борисов 1995: 12-14)。これはエゼロ A 段階と併行するものだが、この年代付けの最終的な結論はまだ出ていないため、ゴリヤマ・デテリナ IV 号丘状墓の構築年代に関しては再考の余地がある。

V. エゼロ文化の系譜と成立

これまでエゼロ文化の系譜を探るために、エゼロ A 段階と周辺地域文化の土器装飾の比較を行った。結果として、エゼロ A 土器は装飾要素を通じてチェルナヴォダ III 文化とウサトヴォ文化と系統関係を有していることが判明した。ここでは抽出された要素をもとに、エゼロ文化の成立に関する考察を試みたい (図 11)。

(1) カラノヴォ遺跡資料の位置付け

カラノヴォ遺跡とチェルナヴォダ III 文化間で共通する装飾要素は凹線文 (A)、凸帯文 (C)、口唇部刻み目文 (D-1)、口縁屈折部内面の刻み目文 (D-2) である。D-2 を除いた装飾要素はエゼロ A 土器でも共有され、さらにエゼロ A 土器にはカラノヴォ遺跡にないチェルナヴォダ III 系の刻線刺突文 (G) と斜線充填刻線文 (H) が認められる。しかし今一つ重要な点はカラノヴォ遺跡の土器に、ウサトヴォ系の装飾が見当たらないことである (図 9)。このことはカラノヴォ遺跡の土器とエゼロ A 土器の有する系統関係が同一でないことを意味している。つまりカラノヴォ遺跡資料とエゼロ A 土器間の差異は、相互の遺跡が近接して位置するため地域差を示しているのではなく、むしろこの系統関係の違いによって生じていると考えられる。

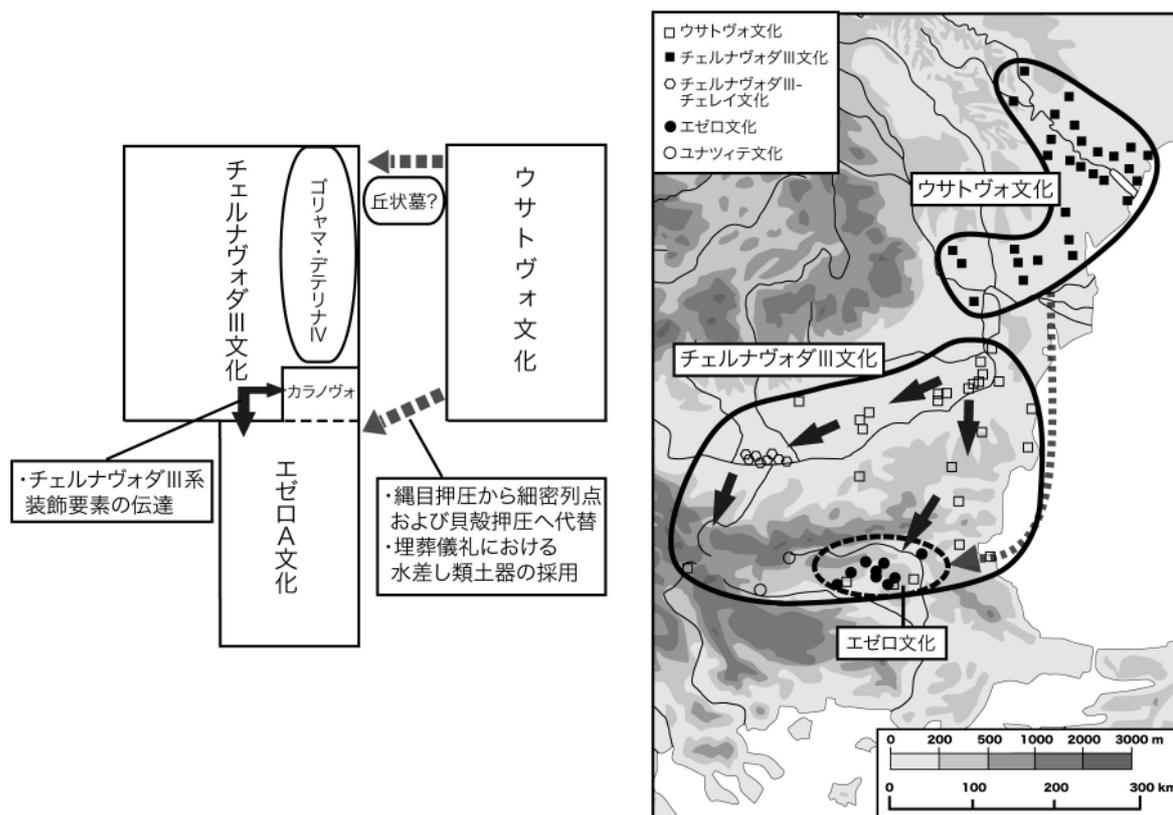


図 11 エゼロ文化の系譜と形成過程

カラノヴォ遺跡 VIIa 期の資料はこれまでエゼロ A 段階と併行すると考えられていた (Hiller 1997; Лещиков 1997)。しかし、今回カラノヴォ遺跡資料はエゼロ A 土器と異なる系統関係を有することが判明したことで、この違いが時間差を反映している可能性が浮上する。換言すれば、カラノヴォ遺跡資料はエゼロ A 土器よりも古く年代付けられるのではないだろうか。現時点では時期差を説明するための層位学的資料も絶対年代も十分に得られていないが、凹線文を通じて相対的な時間関係に関する解釈を提示することができるものと思われる。

着目すべき点は凹線文の施文部位である。エゼロ A 土器には口縁部内面に施文される事例が僅かにしか確認されていないが、チェルナヴォダ III 文化とカラノヴォ遺跡資料では比較的多い。また、カラノヴォ遺跡ではチェルナヴォダ III 文化と同じように胴部外面にも装飾されるが、これはエゼロ A 土器には欠落した特徴である。しかも外面の施文は内面装飾よりも古い時期から認められている。このことからチェルナヴォダ III 文化の凹線文に関しては、カラノヴォ遺跡資料との類似点がエゼロ A 土器よりも多いことが分かる。さらに凹線文がエゼロ A 段階以降に消失することを考慮すると、凹線文はカラノヴォ VIIa 期→エゼロ A 段階→エゼロ A 段階以降という順に減少傾向にある。このことから暫定的ながらカラノヴォ遺跡資料は、

エゼロ A 土器より古く位置づけられるのである。

一方、上述した系統要素から判断すると、カラノヴォ遺跡資料はエゼロ文化ではなく、チェルナヴォダ III 文化に属すると判断されるべきかもしれない。だが、カラノヴォ遺跡とエゼロ A 段階における共通点として、チェルナヴォダ III 文化に特徴的な凸帯文が少量しか認められない点と、チェルナヴォダ III 文化にはない細密列点と水差しが存在する点を考慮すると、カラノヴォ遺跡資料はチェルナヴォダ III 文化に典型的な資料だけで構成されているとは言えない。特に文様の詳細は判別できないものの、細密列点文と水差しがエゼロ文化のウサトヴォ系要素と関連している点は示唆的である。以上の点からチェルナヴォダ III 文化の影響を受けたカラノヴォ遺跡資料は、エゼロ文化へ変異する前段階を示していると考えられる。あるいは、チェルナヴォダ III 文化からエゼロ文化への過渡期的様相を呈していると言い表すこともできる。

(2) エゼロ A 土器の成立

エゼロ A 土器のチェルナヴォダ III 系要素は、カラノヴォ遺跡資料と共有する装飾要素とは別の新要素 (G, H) も含めて構成されており、チェルナヴォダ III 文化の影響がエゼロ A 土器に継続して及んでいることが分かる。黒海北西地域のウサトヴォ系要素は孔列文と、異なる施文法

による類似した文様構成 (e, f-1-3) をもつ土器装飾としてこの時期に登場する。

貝殻押圧文、細密列点文、縄目押圧文はすべて器面に施文具を押し当てて文様を作出する施文法である。おそらくエゼロ A 土器に施文された e・f 文様構成の貝殻押圧文 (E) と細密列点文 (F-1-3) は、縄目押圧によって形成される点列状の装飾効果を模倣したものではないかと考えられる。また縄目原体を製作する技術を備えている者であれば、生活地が変わって全く同じ原体の素材が移動先で入手できなくても、おそらく居住地や生活圏内で手に入る別の素材 (植物の繊維や動物の毛など) を使って縄目原体を作ることができたはずであり、また移動する前に原体そのものを携えていくこともできたはずである。それゆえ、E・F 装飾要素は土器伝統に縄目押圧文を元来もたない集団が同じような装飾効果を得るために、異なる施文具で類似した文様を施した代替現象であると考えられる。一方の孔列文に関しては縄目押圧文ほど施文法が特異ではないため、そのまま伝わったと推測される。

この所見にブルガリア地域内のチェルナヴォダ III 文化遺跡で孔列文や e・f 文様構成、細密列点文 (F-1-3) が知られていない点を加味すると、孔列文の採用と一連の装飾要素に関する文様の代替措置は、上トラキア平野にチェルナヴォダ III 文化を介して伝播しなかったことを示している。したがって現時点ではこれらの文様要素は、チェルナヴォダ III 文化とは異なる経路で黒海北西地域から上トラキア平野へ到達したと考えられる。

しかし忘れてはならないのは、エゼロ A 段階初めから縄目押圧文土器が僅かながら装飾要素の一部を占めている点である。エゼロ A 段階直前に縄目押圧文土器が出土した遺跡には、ブルガリア地域外に分布するチェルナヴォダ I 文化とウサトヴォ文化、そしてチェルナヴォダ III 文化の遺跡、さらに黒海北の草原地帯が挙げられる。翻ってそれ以外の地域では、エゼロ A 土器と関連するような縄目押圧文土器は見当たらない。現段階でその由来や伝播過程、先のウサトヴォ系要素との関係を特定することは困難であるが、上トラキア平野の縄目押圧文は自生的なものではなく、少なくとも黒海西域から草原地帯の間に位置する地域の影響でエゼロ A 段階に上トラキア平野に伝わってきた。それゆえ先のチェルナヴォダ III 系要素とウサトヴォ系装飾の代替措置の事例を含めて考慮してみると、エゼロ文化を構成する外来系要素は一度に全てが上トラキア平野に伝わるのではなく、複数回にわたり波及してきたと考えられる。

- (3) 葬送儀礼用の土器によるエゼロ文化形成の補足説明
本来それ専門の研究が必要とされる葬送儀礼と関連する

遺構から出土した土器を基に、上述したエゼロ文化の成立と外来要素の流入期に関する補足的な考察を行う。まずゴリヤマ・デテリナ IV 号丘状墓の構築土に設けられた儀礼遺構 No. 3 はチェルナヴォダ III 文化に比定され、この下層には別の土壌墓と儀礼遺構が検出された。つまりこの丘状墓はエゼロ A 段階の前にはすでに構築、利用されていた。さらにチェルナヴォダ III 文化には丘状墓を構築する伝統がない¹³⁾ (Morintz und Roman 1968: 97) 点も勘案すれば、この丘状墓を構築した集団はチェルナヴォダ III 文化の期間か、またはそれ以前から上トラキア平野に存在していた可能性が高い。

移行期から前期青銅器時代初頭段階に分布する丘状墓は、ドナウ川下流域と南ベッサラビアのチェルナヴォダ I 文化とその亜型と目されるハジデルーチェルナヴォダ I グループ (Manzura 1999: 116)、そして黒海北西地域のウサトヴォ文化、さらに北の草原地帯において数多く構築されている。一方、該期にブルガリアやギリシアの各地域では同様の丘状墓は認められない。よって丘状墓を構築する文化の起源地が、ドナウ川下流域から北方の草原地帯にあると考えて問題はないだろう¹⁴⁾。

ベレケトスカ・モギラ平地集団墓とゴリヤマ・デテリナ II 号丘状墓の副葬品を構成する水差しと水差し様土器は、ウサトヴォ文化の副葬品に少量ながら確認された。ここに副葬品としての水差し利用という共通点を通じて、ウサトヴォ文化とエゼロ A 文化とのつながりを見てとることができる。水差しを副葬する習慣はチェルナヴォダ III 文化にないため、その文化を介さずに上トラキア平野のエゼロ A 文化に影響が及んだのだろう。これはウサトヴォ系装飾要素と連なる動きを示しているように見える。また帰属時期の問題は残されているものの、チェルナヴォダ遺跡のアスコスも北から南への文化要素の伝達経路に沿って上トラキア平野に到来したのかもしれない。

ゴリヤマ・デテリナ IV 号丘状墓と II 号丘状墓は相互に近接して位置しているが、出土土器の器種内容は異なっている。これは各丘状墓に帰属する集団構成員の違いか、あるいは集団内の格差を表している可能性もある。しかし仮にこれらの丘状墓が同時期に同文化集団に利用されていたとしたら、該期の特徴を示す痕跡が各丘状墓に残されていてもよい。両遺跡からこうした痕跡がそれほど認められない理由には、カラノヴォ遺跡資料とエゼロ A 土器に見たように、チェルナヴォダ III 文化とウサトヴォ文化の系統差と要素伝達の時間差が関係していると考えられる。

(4) エゼロ文化形成の歴史的背景

これまでの論点をまとめると、上トラキア平野の後期銅石器時代とエゼロ A 段階における土器間の継続性はほと

んど認められず、両時期間で土器伝統はあまり共有されていなかった。ゴリヤマ・デテリナ IV 号丘状墓は、少なくともチェルナヴォダ III 文化が上トラキア平野にもたらされる頃には、黒海北か北西地域の影響で存立していた。カラノヴォ遺跡はドナウ川下流域に端を発するチェルナヴォダ III 文化の影響のもとで成立し、その後エゼロ文化はチェルナヴォダ III 系要素に黒海北西地域のウサトヴォ文化の影響を合わせて形成された。

本稿ではエゼロ A 文化とウサトヴォ文化とチェルナヴォダ III 文化間の土器装飾要素の類似性から系統性という側面を強調して取り上げたため、これらの相違点に関する検証は十分に実施されていない。この点について少し言及しておく、エゼロ A 土器にはチェルナヴォダ III 文化とウサトヴォ文化に類例のない土器も存在する（例えば、口縁部に施される縦位棒状貼付文や舟形土器など）。つまり、チェルナヴォダ III 文化とウサトヴォ文化の要素がエゼロ A 土器の全体を構成している訳ではないため、エゼロ A 段階の遺跡を残した集団の由来の全容はまだ明らかになっていないのである。少なくともエゼロ文化形成時には、チェルナヴォダ III 文化集団とカラノヴォ遺跡資料を残した集団が上トラキア平野に居住していたと推測されるが、上トラキア平野にまた別の系譜をもつ集団が居住していた可能性や、移行期から考古資料を残さない集団が存在していた可能性も現時点で除外することはできない。

上トラキア在来集団の存在を措定すると、第3の仮説は第1の仮説である移住民仮説を採用せずとも成立しうるが、エゼロ文化が外来文化要素の系譜をもち形成されたと考えられるため、やはり第3の仮説をそのまま受容することはできない。エゼロ文化の成立に関する結論を導出するためには、系統関係で結ばれているドナウ川下流域と黒海北西地域、そしてその周辺地域の状況を含めて考えねばならない。したがって現在のルーマニア北東部からウクライナ西部に、前5千年紀から前3千年紀まで展開していたククテニ・トリポリエ文化の動向は重要視されるべきであろう。ククテニ・トリポリエ文化はウサトヴォ文化が登場する前段階（ククテニ B～トリポリエ B2-C1 段階：前3700年～前3400年）の黒海北西の草原地帯において、驚いたことに最大で400haを超える巨大集落が登場するまで発展したと言われている（Anthony 2007: 277）。だが巨大集落はウサトヴォ文化が出現する頃、急激に衰退、消失する（Anthony 2007: 346-349）。凋落の要因に関する最終的な結論はまだ出ていないようだが、該期の黒海北西地域で重大な社会変化の画期を迎えていたのは確かであろう。そこで今回取り扱った資料要素の観察結果を勘案すると、エゼロ文化の形成はククテニ・トリポリエ文化の衰退と消失を震源とした一種の玉突き現象の発生に起因したと考えら

れないだろうか。筋書きの一例として、巨大集落を支えていた社会システムの崩壊したククテニ・トリポリエ文化はウサトヴォ文化を、ウサトヴォ文化はチェルナヴォダ III 文化を南へと押しやり、チェルナヴォダ III 文化の集団が上トラキア平野に到達する。このとき墳丘墓構築集団が在地の牧畜集団との間で接触があったかもしれない。その後も南方への影響は続き、チェルナヴォダ III 文化要素を持つ集団がウサトヴォ文化の影響を受けて、エゼロ文化が形成されるというものである。おそらくこうした段階的かつ漸進的な集団の移動および情報の伝達が、文化要素の変異や部分的な要素の伝播を生じさせたと推測される。

おわりに

本稿ではエゼロ文化の系譜を示す考古資料を取り上げて、その文化形成の過程を考察し、チェルナヴォダ III 文化とウサトヴォ文化との系統的な関係性を見出した。そして各文化要素および集団が時間差を伴って押し出されるように、直接的または間接的に上トラキア平野へと至り、カラノヴォ遺跡に続いてエゼロ文化が形成されたのである。この文化形成過程の全容と詳細まで明示することはできなかったが、レシュタコフは上トラキア平野の青銅器時代の開始について、一連の変化は集団が「あるところから単独で侵入してきた結果ではなく、伝播から大規模な侵入まで様々な形の影響力をもつ長いプロセス」（Лещаков 2006: 155）によるものであると指摘している。また K. クリステイアンセン（Kristiansen）によれば、集団移動または移住を、考古学において追跡することは困難であるという。その理由として、移動や移住の影響力は周辺の在地文化に影響を与える伝播や文化変容と組み合わせたり、複雑なプロセスを生じさせ、さらに在地文化との迅速な同化により、各文化の特徴を識別することが難しくなる点が挙げられている（Kristiansen 2005: 78）。

本稿では各文化の考古資料の僅かな残滓をかき集めて強引に結論を導き出した観は否めないが、これまでに具体的に問われてこなかったエゼロ文化の系譜とその形成に関する解釈を大枠で提示することができた。一方で資料的制限もあり、チェルナヴォダ III 文化をはじめ、本稿で比較対象とした考古文化を各々1つの単位として取り扱ったことで、文化内および文化間の動的な要素の変遷を十分に示すことができなかった。こうした状況のなか近年ではブルガリア国内における緊急調査により、移行期とチェルナヴォダ III 文化の資料数は増加している（Ганецовски 2009: 111; Гергов 2009: 108）。今後は該期の新しい資料の更なる充実化と既存資料との体系化を図り、各文化の時空間的な相互関係の整理を行った上で、交易などの地域間交流や社会構造の解明を目的とした研究を進めていく必要がある。

本稿を執筆するにあたり、東海大学トラキア発掘調査団団長の禿仁志先生にはデアドヴォ遺跡の未公表資料の使用を快諾して頂きました。また先生には平素より数多くのご指導を賜りました。R. フリストヴァ氏（ブルガリア、カルノバト歴史博物館）からは、ブルガリアにおけるチェルナヴォダ III 文化に関する論文と最新の調査状況に関する情報を提供して頂きました。査読を担当された先生方からは貴重な意見を数多く頂戴しました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

本稿では東海大学トラキア発掘調査団の未公表資料を考察に用いていますが、この内容は調査団としての見解ではなく個人的なものであり、全ての文責は筆者にあることを申し添えておきます。

註

- 1) 本稿では便宜上、以下の用語を用いる。「エゼロ文化」は前期青銅器時代を通して、上トラキア平野東部を中心に展開していた集団が残した考古資料の総体を指す。「エゼロ A 段階」はエゼロ文化の前段階を示す時間概念として使用する。「エゼロ A 文化」はエゼロ A 段階に比定される考古資料の総体を、「エゼロ A 土器」とはエゼロ A 段階に比定される土器を指す。
- 2) 東欧では絶対年代が同一の値を示している場合も、時代名称は異なっている場合が多い。たとえばブルガリアの前期青銅器時代に相当する時期は、ルーマニアでは銅器時代から青銅器時代の間の時期に比定され、セルビアでは銅器時代と呼ばれている (Garašanin 1982; Morintz und Roman 1968; Tasić 1995)。したがってこれらの地域にまたがって併行関係を取り上げるときは、時代名称ではなく各地域の文化名を用いて、各々の時間的な相互関係を把握することが通例である。本稿では現在ブルガリア考古学で採用されている時代名称の表記法に統一し、各地域の文化名はそのまま使用する。本稿の基本的な編年の枠組については表 1 に示した。
- 3) 北東ブルガリアのテル集落遺跡やヴァルナ墓遺跡においては、前期青銅器時代文化層が後期銅器時代層の直上に堆積する事例は報告されていない (Тодорова 1986)。
- 4) 上トラキア平野で移行期に属すると考えられている遺物が見つかる。それはウマの頭部を模した「笏」と呼ばれる磨製の石製品であり、黒海北の草原地帯に展開していた集団が上トラキア平野に存在していたことを証明する資料と目されている (Тодорова 1986: 222-224)。この石製品は上トラキア平野でこれまで 2 点確認されているが、どちらも正確な出土情報が不明であるため、研究上の位置づけについてはなお議論が行われている (例えば Георгиева 2005)。
一方、リハルドゥスらはトウンジャ川下流域のドラマ・メルジュメクヤ (Drama Merzhmekya) 遺跡に隣接するドラマ・グレナ (Drama Gerena) 遺跡で、ホトニツァ・ヴォドパダ (Hotonitsa Vodopada) 遺跡の資料と型式学的に類似する完形カップを発見した。このカップはその形態的特徴からチェルナヴォダ I 文化に属すると言われている (Lichardus und Iliev 2001: 174)。これらの資料は、上トラキア平野に移行期遺跡が存在することを証明するという点で重要である。
- 5) クルガンとは主に前期青銅器時代以降に中央ユーラシアから東欧を中心に分布する墳丘をもつ土壙墓のことである。
- 6) ただし、P. ゲオルギエヴァ (Georgieva) は当時のブルガリアにおける人口減少を明確に示すことは、資料的な制限があつて困難であると述べている (Георгиева 2005: 154)。
- 7) ブルガリア北部に位置するルセ (Ruse) 遺跡とテル・ホトニツァ (Hotnitsa) 遺跡の事例は、ユナツィテ遺跡に並ぶものとして取り上げられている (Merpert 1997: 75)。

- 8) 調査者によると、この儀礼遺構とは土坑状の遺構のことである。ここでは人骨は検出されなかったが、土器や動物骨、石製品などが見つまっている (Лещakov и Борисов 1995: 9-15)。
- 9) 現在バルカン半島の前期青銅器時代研究では、チェルナヴォダ III 文化を前期青銅器時代の枠組みで捉える研究者と、移行期の枠組みで捉える研究者で意見が二分されている。前者はニコロヴァ、後者は I. ヴァイソフ (Vajsov) に代表される (Nikolova 1999; Vajsov 1993)。両者の意見の相違は主にヒ素銅製品の解釈に表れているが、本稿ではこの議論に立ち入らず、時代名称として移行期にチェルナヴォダ I 文化、ホトニツァ文化、ガラティン文化、ヤゴディナ文化、前期青銅器時代にチェルナヴォダ III 文化、ウサトヴォ文化、エゼロ文化を対応させておく。チェルナヴォダ III 文化とウサトヴォ文化の時代名称については、絶対年代のデータと考古資料が揃ってから議論すべきである。
- 10) アンソニーによれば、ウサトヴォ文化の開始期に前 3300/3200 年という数値が割り当てられている (Anthony 2007: 349)。
- 11) アスコスとは古代ギリシアで使用されていた水差しの一の名称である。
- 12) 本稿では施文具の違いを問わず、これらの文様構成そのものを指す場合、e、f-1 のように小文字アルファベットで表記する。
- 13) マンズラはブルガリア北東部のドゥランクラク遺跡で、チェルナヴォダ II 文化に特徴的なヒ素銅製短剣を副葬品にもつ埋葬地が見出されたとして、この遺構がチェルナヴォダ I 文化に属するという遺跡報告者の解釈に批判を加えている (Manzura 2005: 51-52)。
- 14) ただしゴリヤマ・デテリナ IV 号丘状墓では、チェルナヴォダ I 文化やウサトヴォ文化の丘状墓で採用されていた環状列石や周溝は検出されていない (Manzura 1999: 116; Патокова 1979: 85-91)。つまりゴリヤマ・デテリナ IV 号丘状墓は、北方の丘状墓と全く同じ様には構築されていないのである。

参考文献

- Anthony, D. W. 2007 *The Horse, the Wheel, and Language -How Bronze-Age Riders from the Eurasian Steppes Shaped the Modern World*. Princeton and Oxford, Princeton University Press.
- Aslanis, I. 1985 *Kastanas. Ausgrabungen in einem Siedlungshügel der Bronze- und Eisenzeit Makedoniens 1975-1979. Die Frühbronzezeitlichen Funde und Befunde*. Berlin, Wissenschaftsverlag Volker Spiess.
- Bailey, D. and I. Panayotov (eds.) 1995 *Prehistoric Bulgaria*. Monographs in World Archaeology 22. Madison Wisconsin, Prehistory Press.
- Bertram, J.-K. 2002 *Karasura -Die Prähistorischen Funde und die Münzen (Ausgrabungen 1981-1997)*. II, 5-142. Langenweissbach, Beier & Beran.
- Boyardziev, J. 1995 *Chronology of Prehistoric Cultures in Bulgaria*. In Bailey and Panayotov (eds.), 149-191.
- Christmann, E. 1996 *Die Deutschen Ausgrabungen auf der Pevkakia-Magula in Thessalien II: Die Frühe Bronzezeit*. Bonn, R. Habelt.
- Coleman, J. E. 1977 *Kephala -A Late Neolithic Settlement and Cemetery*. J. Augustin, Glückstadt, Princeton University Press.
- Eslık, C. 1992 *Elmalı-Karataş -The Neolithic and Chalcolithic Periods: Bağaç and Other Sites*. Vol. I. Bryn Mawr, Science Press.
- Garašanin, M. 1982 *The Eneolithic Period in the Central Balkan Area*. In J. Boardman, I. E. S. Edwards, N. G. L. Gammond and E. Sollberger (eds.), *The Cambridge Ancient History. The Prehistory of the Balkans, the Middle East and the Aegean World, Tenth to Eighth Centuries B.C., Vol. III, Part I*, 136-162. Cambridge, Cambridge University Press.

- Georgiev, G. I. 1961 Kulturgruppen der Jungstein- und der Kupferzeit in der Ebene von Thrazien. In J. B. Hm and S. J. De Laet (eds.), *L'Europe à la fin de l'âge de pierre*, 45-100. Prague, L'acad mie tch coslovaque des sciences.
- Georgieva, P. 1988 Die Prähistorische Siedlung in der Gegend Čukata beim Dorf Galatin bei Vraca (Bulgarien). *Studia Praehistorica* 9: 111-146.
- Gergov, V. 2007 Die Pastös Bemalte Keramik aus der Finalkupferzeitlichen Siedlung Teliš-Redutite, Zentral-Nordbulgarien. In M. Stefanovich und Ch. Angelova (Hrsg.), *PRAE - In Honorem Henrieta Todorova-*, 135-138. Sofia, the Bulgarian Archaeological Institute and Museum.
- Gimbutas, M. 1970 Proto-Indo-European Culture: The Kurgan Culture during the Fifth, Fourth, and Third Millennia B.C. *Indo-European and Indo-Europeans* 23(4): 155-197.
- Gimbutas, M. 1973 The Beginning of the Bronze Age in Europe and the Indo-Europeans: 3500-2500 B.C. *The Journal of Indo-European Studies* 1(2): 163-214.
- Gimbutas, M. 1977 The First Wave of Eurasian Steppe Pastoralists into Copper Age Europe. *The Journal of Indo-European Studies* 5: 277-338.
- Gimbutas, M. 1979 The Three Waves of the Kurgan People into Old Europe, 4500-2500 B.C. *Archives suisses d'anthropologie générale*, Gen ve 43(2): 113-137.
- Görsdorf, V. J. und J. Bojadžiev 1997 Zur Absoluten Chronologie der Bulgarischen Urgeschichte -Berliner 14C-Datierungen von Bulgarischen Archäologischen Fundplätzen. *Eurasia Antiqua* 2: 105-173.
- Hanschmann, E. und V. Milojcic 1976 *Die Deutschen Ausgrabungen auf der Argissa-Magula in Thessalien III: Die Frühe und Beginnende Mittlere Bronzezeit*. Bonn, Rudolf Habelt Verlag.
- Hiller, S. 1997 Bronzezeitliche Keramik aus den Gruben, B, H, C, D und S. In S. Hiller et al. (Hrsg.), *Karanovo. Die Ausgrabungen im Südsektor 1984-1992*, Band I, 323-350. Wien, Phoibos Verlag.
- Hiller, S. und V. Nikolov 2000 Karanovo 1947-1997. Das Neolithikum Forschungsgeschichte und Daten zur Stratigraphie. In S. Hiller et al. (Hrsg.), *Karanovo. Beiträge zum Neolithikum in Südosteuropa (Gebundene Ausgabe)*, Band III, 7-9. Wien, Phoibos Verlag.
- Hood, S. 1981 *Excavations in Chios 1938-1955 Prehistoric Emporio and Ayio Gala*. Vol. I. Oxford, Thames and Hudson.
- Joukowsky, M. S. 1986 *Prehistoric Aphrodisias*. Vols. I and II. Belgium, Court-St-Etienne.
- Kalčev, P. 2002 *Das Frühbronzezeitliche Gräberfeld von Stara Zagora - "Bereketska Mogila"(Bulgarien)*. Saarbrücker Studien und Materialien zur Altertumskunde 8. Bonn, Dr. Rudolf Habelt Verlag.
- Kristiansen, K. 2005 Theorising Diffusion and Population Movements. In C. Renfrew and P. Bahn, *Archaeology. The Key Concepts*, 75-79. London and New York, Routledge.
- Leshtakov, K., T. Kancheva-Russeva and S. Stoyanov 2001 Prehistoric Studies. Settlement Sites. In I. Panayotov et al. (eds.), *Maritsa-Iztok. Archaeological Research*. Vol. 5, 15-68. Radnevo, Maritsa Iztok Archaeological Expedition.
- Lichardus, J. und I. Iliev 2001 Die Cernavodă III -Siedlung von Drama-Merdžumekja in Südostbulgarien und ihre Bedeutung für Südosteuropa. In Roman and Diamandi (eds.), 166-198.
- Manzura, I. 1999 Cernavoda I Culture. In L. Nikolova (ed.), *The Balkans in Later Prehistory. Periodization, Chronology and Cultural Development in the Final Copper and Early Bronze Age (Fourth and Third Millennia BC)*, BAR International Series 791, 95-174. Oxford, Archaeopress.
- Manzura, I. 2003 Innovations in the Ceramic Style and the Bronze Age Genesis in the Northeast Balkans. In L. Nikolova (ed.), *Early Symbolic Systems for Communication in Southeast Europe Part I*, BAR International Series 1139, 313-335. Oxford, Archaeopress.
- Manzura, I., E. Savva and I. Bogataya 1995 East-West Interactions in the Eneolithic and Bronze Age Cultures of the North-West Pontic Region. *The Journal of Indo-European Studies* 23 (1-2): 1-51.
- Marinescu-Bîlcu, S. 1990 Askoi et Rhytons Énéolithiques des Régions Balkano-Danubiennes et leurs Relations Avec le Sud, à la Lumière de Quelques Pièces de Căsciarele. *Dacia* 34: 5-21.
- Merkyte, I. 2007 Ezero-Kale -from the Copper Age to the Bronze Age in the Southern Balkans. *Acta Archaeologica* 78(2): 1-78.
- Merpert, N. 1997 The Earliest Indo-Europeanization of the North Balkan Area in Light of a New Investigation in the Upper Thracian Valley. In J. Marler (ed.), *From the Realm of the Ancestors: An Anthology in Honor of Marija Gimbutas*, 70-77. Connecticut, Knowledge, Ideas & Trends.
- Morintz, S. und P. Roman 1968 Aspekte des Ausgangs des Äneolithikums und der Übergangsstufe zur Bronzezeit im Raum der Niederdonau. *Dacia* 12: 45-128.
- Němejcová-Pavůková, V. 1982 Periodisierung der Badener Kultur und Ihre Chronologischen Beziehungen zu Südosteuropa. *Thracia Praehistorica. Supplementum PULPUDEVA* 3: 150-176.
- Němejcová-Pavůková, V. 1999 Bemerkungen zur Frühbronzezeit in Westbulgarien und Nordostgriechenland (im Licht der "Importe" aus dem Karpatenbecken). *Slovenská Archeológia* 47(1): 45-65.
- Nikolova, L. 1996 Settlements and Ceramics: The Experience of Early Bronze Age Bulgaria. *Reports of Prehistoric Research Projects* 1(2-4): 145-186.
- Nikolova, L. 1999 *The Balkans in Later Prehistory. Periodization, Chronology and Cultural Development in the Final Copper and Early Bronze Age (Fourth and Third Millennia BC)*. BAR International Series 791. Oxford, Archaeopress.
- Nikolova, L. 2000 The Yunatsite Culture -Periodization, Chronology and Synchronizations. *Reports of Prehistoric Research Projects* 2-3: 33-97.
- Nikolova, L. 2001 Approach to the Genesis and Initial Development of the Early Bronze Age Cultures in the Lower Danube Basin and in the Southern Balkans. In Roman and Diamandi (eds.), 236-260.
- Nikolova, L. 2005 Social Changes and Cultural Interactions in Later Balkan Prehistory. *Reports of Prehistoric Research Projects -Prehistoric Archaeology & Anthropological Theory and Education* 6-7: 87-96.
- Parzinger, H. 1991 Zur Rachmani-Periode in Thessalien. *Germania* 69(2): 359-388.
- Parzinger, H. 1993 *Studien zur Chronologie und Kulturgeschichte der Jungsteinzeit, Kupferzeit und Frühbronzezeit Zwischen Karpaten und Mittlerem Taurus*. Mainz am Rhein, Philipp von Zabern.
- Petrakis, S. L. 2002 *Aiyoryitika -The 1928 Excavations of Carl Blegen at a Neolithic to Early Helladic Settlement in Arcadia*. Philadelphia, The Institute for Aegean Prehistory Academic Press.
- Petrova, V. 2004 The Ceramic Assenblage of the Late Chalcolithic Karanovo VI Culture, Phase III. In V. Nikolov et al. (eds.), *Prehistoric Thrace*, 425-432. Sofia, Institute of Archaeology with Museum -BAN and Regional Museum of History- Stara Zagora.
- Rassamakin, J. 1999 The Eneolithic of the Black Sea Steppe: Dynamics of Cultural and Economic Development 4500-2300 BC. In M. Livine et al. (eds.), *Late Prehistoric Exploitation of the Eurasian Steppe*, 59-182. Cambridge, McDonald Institute for Archaeological Research, Distributed by Oxbow Books.

- Roman, P. 2001 Die Cernavodă III-Boleráz-Kulturererscheinung an der unteren Donau. In Roman and Diamandi (eds.), 13-59.
- Roman, P. and S. Diamandi (eds.) 2001 *Cernavodă III-Boleráz. Ein Vorgeschichtliches Phänomen Zwischen dem Oberrhein und der Unteren Donay. Simposium Mangalia/Neptun (18-24. Oktober 1999)*. Studia Danubiana. Series Symposia II. București.
- Sampson, A. 2002 *The Neolithic Settlement at Ftelia, Mykonos*. Rhodes, University of the Aegean Department of Mediterranean Studies.
- Séfériades, M. 2001 Dikili Tash et Cernavodă III-Boleráz: Contribution aux Recherches Archéologiques Européennes Récentes sur la Période de Transition et le Début de l'Age du Bronze (Europe Centrale et Orientale). In Roman and Diamandi (eds.), 109-164.
- Sherratt, A. 1987 The Early Bronze Age Pottery. In C. Renfrew, M. Gimbutas and E. Elster (eds.), *Excavations at Sitagroi, a Prehistoric Village in Northeast Greece, Vol. 1*, 429-76. Los Angeles, University of California.
- Sperling, J. 1976 Kumtepe in the Troad: Trial Excavation, 1934. *Hesperia* 45: 305-364.
- Tasić, N. 1995 *Eneolithic Cultures of Central and West Balkans*. Belgrade, Draganić.
- Todorova, H. 1992 Bericht über die Kontrollgrabung von 1979 auf Golemanovo Kale und Neuauswertung der Prähistorischen Fundgutes. *Die Spätantiken Befestigungen von Sadovec (Bulgarien). Ergebnisse der Deutsch-Bulgarisch-sterreischen Ausgrabungen 1934-1937* 43(2): 361-374.
- Todorova, H. 1995 The Neolithic, Eneolithic and Transitional Period in Bulgarian Prehistory, In Bailey and Panayotov (eds.), 79-98.
- Tončeva, G. 1981 Un Habitat Lacstre de l'Age du Bronze Ancien dans les Environs de la Ville de Varna Ezerovo II). *Dacia* 25: 41-62.
- Vajsov, I. 1993 Die Frühesten Metalldolche Südost- und Mitteleuropas. *Præhistorische Zeitschrift* 68(1): 103-145.
- Weisshaar, H.-J. 1989 *Das Späte Neolithikum und das Chalkolithikum*. Vol. I. Bonn, Dr. Rudolf Habelt GmbH.
- Аврамова, М. 1992 Централните Родопи и проблемът за Преходния период от енеолита към бронзовата епоха. *Археология* 34(2): 51.
- Вайсов, И. 1992 Състояние на Проучванията на т. Нар. "Преходен Период в България". *Археология* 34(2): 45-49.
- Ганецовски, Г. 2009 Спасителни Археологически Разкопки на Укрепено Праисторическо Селище Калето край Град Мездра. В Д. Гергова (ред.), *Археологически Открития и Разкопки през 2008 г.*, 109-113. София, Фабер.
- Георгиев, Г. И., Е. Мерперт, Р. В. Катинчаров и Д. Г. Димитров 1979 *Езеро-Раннобронзовото Селище*. София, Българската Академия на Науките.
- Георгиева, П. 2005 За Зооморфните Скиптри и Последните Етапи на Късноенеолитните Култури Варна, Коджадермен-Гумелница-Караново VI и Криводол-Сълкуца. In T. Stoyanov, S. Angelova and I. Lozanov (ред.), *Studia Archaeologica Universitatis Serdicensis. Supplementum IV. Stephanos Archaeologicos in honorem Professoris Ludmili Getov IV*: 144-166. Sofia, St. Kliment Ohridski University Press.
- Гергов, В. 2009 Археологически Проучвания на Праисторическото Селище в М. "Езерото" при с. Садовец, Общ. Долни Дъбник. В Д. Гергова (ред.), *Археологически Открития и Разкопки през 2008 г.* 106-108. София, Фабер.
- Дергачев, В. А. 1978 *Выхватинский Могильник*. Кишинев, Штиинца.
- Драганов, В. 1990 Културата Чернавода III на Територията на България и Позападното Черноморско Крайбрежие. *Добруджа* 7: 156-179.
- Збенович, В. Г. 1974 *Позднетрипольские Племена Северного Причерноморья*. Киев, Наукова Думка.
- Илчева, В. 2002 *Хотница. Стари селища и находки*. Част I, Велико Търново, ПАН-ВТ.
- Катинчаров, Р., Я. Бест, В. Николов и В. Николова 1980 Селищна Могила до с. Дядово: Сондажен Изкоп (Археологически Разкопки 1977/1978 г.). *Expeditio Thracia* 1: 8-94.
- Катинчаров, Р. и В. Мацанова 1993 Разкопки на Селищната Могила при с. Юнаците, Пазарджишко. Във В. Николов (ред.), *Праисторически Находки и Изследвания – Сборник в памет на проф. Георги, И. Георгиев*, 155-170. София, Българска Академия на Науките.
- Колева, Б. 1993 Къснохалколитни Аскоси от Долнослав, Пловдивско. Във В. Николов (ред.), *Праисторически Находки и Изследвания – Сборник в памет на проф. Георги, И. Георгиев*, 121-128. София, Българска Академия на Науките.
- Кънчев, М. 1995 Надгробна Могила II (Голямата Могила) до Село Голяма Детелина, Община Раднево (Част D). В Панайотов и др. (ред.), 35-63.
- Лешаков, К. 1997 Изследвания върху Бронзовата Епоха в Тракия I. Сравнителна Стратиграфия на Селищните Могили от Ранната Бронзова Епоха в Югоизточна България. *Годишник на Софийския Университет "Св. Климент Охридски" Исторически Факултет* 84-85(за 1992): 5-119.
- Лешаков, К. 2006 Бронзовата Епоха в Горнотракийската Низина. *Годишник на Софийския Университет "Св. Климент Охридски" Исторически Факултет-Специалност Археология* III(за 2002): 141-216.
- Лешаков, К. и Б. Борисов 1995 Надгробна Могила IV от Ранната Бронзова Епоха в Землището на Село Голяма Детелина, Община Раднево. В Панайотов и др. (ред.), 9-33.
- Лешаков, К. и Ц. Попова 1995 Надгробна Могила II (Голямата Могила) до Село Голяма Детелина, Община Раднево (Част II). В Панайотов и др. (ред.), 65-86.
- Панайотов, И. 1984 За Формирането на Раннобронзовите Култури в Българските Земи. *Археология* 26(2-3): 5-15.
- Панайотов, И. и др. (ред.) 1995 "Марица Изток" *Археологически Проучвания III*. Раднево, Експедиция "Марица Изток"
- Патоква, Э. Ф. 1979 *Усатовское Поселение и Могильники*. Киев, Наукова Думка.
- Патоква, Э. Ф. 1980 Новый Могильник Усатовского Типа у с. Маяки. *Северо-Западное Причерноморье в Эпоху Первобытно-Общинного Строя*, 71-87. Киев, Наукова Думка.
- Патоква, Э. Ф. и В. Г. Петренко 1989 Новые Источники и Проблемы Изучения Познего Триполья на Западе Причерноморских Степей. В Э. Ф. Патоква (ред.), *Памятники Трипольской Къльтуры в Северо-Западном*

- Причерноморье*, 50-81. Киев, Наукова Думка.
- Тодорова, X. 1979 *Енеолит Болгарии*. София, София Пресс.
- Тодорова, X. 1986 *Каменно-Медната Епоха в България*. София, Наука и Изкуство.
- Христова, Р. 2008 Керамика от Началото на Ранната Бронзова Епоха от м. Бадъ Бунар край Карнобат. *Археогия* 49(1-4): 93-102.
- 禿 仁志編 2005『ブルガリア・デヤドヴォ遺跡の第16次発掘報告(2004)』東海大学トラキア発掘調査団。
- 禿 仁志・千本真生 2008「ブルガリア・上トラキア平野の青銅器時代研究－青銅器時代の始まりに関する2、3の問題について」『日本考古学協会第74回総会研究発表要旨集』102-103頁。
- 関根孝夫・禿 仁志編 1999『Djadovo Studies 2 デヤドヴォ遺跡(ブルガリア)第12次発掘調査報告(1998)』東海大学トラキア発掘調査団。
- 関根孝夫・禿 仁志編 2000『Djadovo Studies 3 デヤドヴォ遺跡(ブルガリア)第13次発掘調査報告(1998)』東海大学トラキア発掘調査団。
- 千本真生 2009「ブルガリア、テル・デヤドヴォ遺跡の前期青銅器時代土器とその編年的位置づけ」『日々の考古学2』429-444頁 東海大学考古学研究室。
- 東海大学トラキア発掘調査団 1996「デヤドヴォ遺跡(ブルガリア)第10次発掘調査概報(1995)」『バルカン・小アジア研究』20号 65-96頁。

千本 真生

東海大学大学院博士課程後期

Masao SEMMOTO

Tokai University